

元末明初における宗族形成の風潮

井 上 徹

〈はじめに〉

一三六八年、元末の群雄のなかから台頭した朱元璋は、応天府（南京）を首都として明朝国家を樹立し、元号を洪武と定めた。太祖朱元璋が統治した洪武年間（一三六八年—一三九八年）には、宗族研究のうえできわめて注目すべき事態が発生している。中国社会における経済的先進地域であり、また明朝が政権獲得の主要な場とした江南地域（広義）において、「大家富民」・「鉅室故家」等の呼称をもつ人々の宗族が解体される事態の発生を、当時の著名な学者方孝孺が伝えているのである（後掲）。その宗族の解体を伝えられた「大家富民」・「鉅室故家」等は、従来の研究史上、地主と概括された階層に属し、租佃経営等をその主要な経済活動の内容とする。かれらはまた、宋代以来の儒学の伝統を継承してきた側面をもち、広義には儒教的教養を習得した人々つまり士大夫の出身母体とみなすこともできる。こうした性格を踏まえて、ここではかりに地主・士大夫と呼んでおきたい。^{（1）}最初に、地主・士大夫をめぐる当時の政治情勢を概観してみよう。

明朝国家の成立は、江南地域の地主・士大夫にとって極めて重要な意味をもつものであったとされる。周知のように、モンゴル民族によって樹立された元朝では、中央政府の官職は多く蒙古・色目人あるいは漢人世侯などに独占さ

れており、儒教的教養を問う試験によって公平に人材を採用する科挙の制度は廃止された。仁宗代（一二三―一二三二〇年）には科挙が復活されたものの、進士の数量自体は元朝全体から見ればきわめて少数であり、愛宕松男氏が述べるように、事実上停止の状態となっていたに等しい。⁽²⁾ 元朝治下の江南の士大夫のうち儒士として認定されたものは、科役を免除されるといった特権を与えられ、また、郷試の合格者にも任官の途が開かれていたというが、⁽³⁾ いずれにせよ、身分制の最下層（南人）に位置づけられた江南の地主・士大夫の多くは下級官吏、儒学教官の職に甘んじなければならなかった。⁽⁴⁾ 江南の地主・士大夫を取り巻くこのような状況に変化が生じるのは元末のことである。この問題に検討を加えた檀上寛氏の一連の研究によれば、元末には次第に江南の地主・士大夫にも政治参加が認められるようになり、とくに順帝の至正元年（一三四一）に脱脱が宰相に就任すると、科挙の重視、経筵の開講、儒者の重用等、積極的な漢化政策がとられ、政界に脱脱を中心とする南人のグループが形成された。さらに、元末の反乱のなかから台頭した朱元璋が江南の地主・士大夫の協力を得て政権を樹立すると、当初政権の中枢はこれら地主・士大夫によって占められ、南人政権化した。⁽⁵⁾ また、洪武三年（一三七〇）八月における第一回の郷試を最初とする科挙の再開は、江南の地主・士大夫が恒常的に官界に進出する道が開かれることを意味する。明朝により全面的に復活された科挙による任用において、江南の地主・士大夫はその宋代以来培われてきた高い儒教的教養に支えられて、他の地域よりも優位にあり、科挙合格者のなかで圧倒的比重を占めたという。⁽⁶⁾

ところが、明朝政権確立の過程で、地主・士大夫は衝撃的な事態に直面することになる。朱元璋は、元末の群雄で最後まで彼と敵対した張士誠を滅ぼした際、その根拠地の蘇州一帯の「富民」を強制移住させ、また元朝の故官の家を籍没するなどの処分を行っていたが、その後、度重なる疑獄事件の発動を通じて、江南出身の官僚を弾圧するとともに、明朝の税役制度のなかで糧長・里長等に任じられた「富民」に対しても次々に籍没、強制移住の処分をくわえ

ていった。こうして籍没された土地は国家の官田に組み込まれている。檀上寛氏は、政治史の側面からこの弾圧に注目し、明朝成立後、政権の中枢を占めつつあった南人出身官僚を弾圧することにより、中央集権体制の確立を図ったという。また、森正夫氏は、明朝が大量に江南に設置した官田を考察する研究のなかで、この時期の弾圧が、明朝に敵対した勢力や、元朝の故官、糧長・里長のみにとどまらず、一般の「富民」にも及んだ背景には、元朝以来の所有格差を是正する目的があつたと指摘する。⁽⁷⁾ こうした政策は科挙にも反映されている。明朝は、江南の地主・士大夫の官界への進出に歯止めをかけるために、洪武六年（一三七三）から同一五年までの時期、科挙を一時停止している。科挙を廃止して全国から公平に有能な人材を得ようとしたのであり、その力点は南人に対比される北人の獲得にあつたといふ。⁽⁸⁾

地主・士大夫の宗族の解体は、以上のような弾圧のなかで出現したとされる事態である。この事態を伝えた方孝孺（一三五七年—一四〇二年）は、台州府寧海県の人で、字を希直といい、金華学派の指導的立場にあつた宋濂の門に学んでずば抜けた才能を示し、宋濂も子弟のなかで特に彼を評価した。方孝孺は、何度かにわたる弾圧事件の一つ、空印の案で、当時濟寧知府の職にあつた父の克勤を、同じく胡惟庸の獄で師の宋濂を失っており、洪武年間に断行された弾圧を身近で経験した人であつた。孝孺は、洪武一六年（一三八三）と同二五年の二回、洪武帝に謁見するも任用されず、蜀の猷王に招聘されて世子の教育に当たった。洪武帝の死後、惠帝（建文帝）が即位すると、翰林侍講、侍講学士に任じられ、皇帝の厚い信頼のもとに、国家の政策運営に携わるが、建文三年（一四〇一）、軍隊を発動して建文朝を倒した燕王（永樂帝）に処刑され、その生涯を終えている。⁽⁹⁾

さて、方孝孺は、「采苓子鄭処士墓碣」（『遜志齋集』巻二二）において、宗族の解体に言及している。この一文は、南宋以来、族人の同居共財生活を維持し、当時義門として知られた鄭氏（後述）の家長の鄭濂（字は仲徳、号は采苓

子)を追悼した文章であり、すでに檀上寛、森正夫両氏が江南とりわけ浙東・浙西に対する弾圧の激しさを物語る史料の一つとして注目している。⁽¹⁰⁾ 方孝孺は、

…当是時、浙東西鉅室故家多以罪傾其宗、而処士家数千指特完。蓋忠信之報云。

という。「是の時」とは、洪武一三年(一三八〇)に発動された中書左丞胡惟庸の獄の時点を指し、時に連座した者一万五千人にのぼり、皇帝の六部直轄の契機となるとともに、あわせて江南の「富民」が肅正の対象となったとされる。孝孺は、この事件では、浙東・浙西の「鉅室故家」のみでなく、義門鄭氏を例外として、それらの「宗」もまた「傾」という事態に直面したことを伝える。

しかも、方孝孺によれば、「宗」が打撃を受けたのは、胡惟庸の獄の時のみではなかった。鄭濂の従弟である鄭湜^{シヨク}の墓表(同上書卷二二、「故中順大夫福建布政司左參議鄭公墓表」)で、

太祖高皇帝以神武雄断治海内、疾兼并之俗、在位三十年間、大家富民多以踰制失道、亡其宗。

と述べる。これによれば、「大家富民」・「鉅室故家」と呼称された地主・士大夫の「宗」の解体は、繰り返し弾圧が行われた洪武年間を通じて出現した事態であるかのように思われる。「宗」とは、共同祖先から分派した男系の親族に関わる概念であるが、⁽¹²⁾「其の宗を傾」く、「其の宗を亡ぼせり」といった用法、また同居共財という形式により族人の集合を維持していた鄭氏が右の事態から免れたとされること―したがって、「宗」に含まれている―などからすると、森

正夫氏がすでに解釈しているように、組織としての実体をもった宗族として理解してよいように思われる。⁽¹³⁾ また、実際に大きな打撃を蒙った「宗」には、北宋以来、その宗族機構を維持してきた蘇州の范氏義荘の場合があり、洪武一七年（一三八四）、南宋の時点で合計三千百六十八畝を所有した土地（義田等）のうち、二千畝を明朝に籍没されている。⁽¹⁴⁾

本稿の目的は、洪武年間の弾圧のもとで解体されたと伝えられる浙東・浙西の「鉅室故家」、「大家富民」の宗族の実態を把握することにあるが、それは、宗族の解体という事態がそれ自体衝撃的であるというばかりでなく、宋代以降における宗族の歴史的特質、国家と宗族との関係などの問題を考えるうえでも、重要な手がかりとなるように思われるからである。

一 別表の作成

（1） 同時代人の観察

洪武年間の一連の弾圧の過程で大きな打撃を蒙ったとされるところの宗族がいかなる実態をもっていたのかを検討するまえに、あらかじめ宗族の概念を確認しておきたい。これまでに筆者が進めてきた作業で得られた知見をもとにして言うならば、宗族という男系の血縁集団は、その構成員（族人）相互が血縁関係にあることによって自然に成立したもの、⁽¹⁵⁾ とは言えない。つまり、こうである。特定の祖先を起点として考える場合、最初は、その祖先から、家産均分を契機として何人かの兄弟の個別家族が分派し、同様の相続原理によって、世代を重ねるごとに、当該の祖先につながる子孫の家族が増大していくことになる。すでに、法制史家の滋賀秀三氏によって明快に論じられているよう

に、中国における「家」の基本はこれらの個別家族であり、その特質は同居共財関係にある。氏の見解を要言するならば、同居共財は、家産分割を契機として析出される個別家族において、作為をまたずして自然的に成立するものであつて、収入、消費及び資産保有の全面にわたる共同計算関係（勤労の所産と共同資産からの収益とを収入とし、各人の生活万端の費用を支出する、一つの共同会計を維持する関係）をいい、家産はそうした共同会計の資産内容を指称する言葉であるという。このように共同祖先から分派して独自の共同会計をなす子孫の個別家族、更に配偶関係を合めて、親族（親属）関係が構成されるが、そのままの状態であれば、親族が集団として組織化されているとは必ずしも言えない。宗族は、こうした自然のままにある親族のうち、男系の血統につながる個別家族（族人）を作為的に集合し、彼らを組織化することによって形成される集団であると考えられる⁽¹⁶⁾。

このように作為的に族人を組織化し、宗族を形成しようとする新たな動きは宋代から出現している。親族統制の原理としての宗法を復活して宗族を樹立しようとする主張（宗法復活論）はそうした動向を如実に反映したものであるが、具体的な宗族形成の方法としては、族譜編纂、祠堂設立などによる族人の結集、義田等の共有財を設置し、これを経済基盤として宗族組織を維持する義荘などがよく知られている⁽¹⁷⁾。これらの宗族の諸形態は、独自の共同会計をなす個別家族の集合体とみなすことができるが、これらとは異なる宗族形成の方法をとるものとして、より古い起源をもつ、「合爨」、「共爨」、「聚居」などと称される形態があり、前掲の義門鄭氏のように、この形態が何代にもわたって続くと、「累世同居」と呼ばれる（以下、合爨と総称する）。ごく最近、小林義廣氏は、宋代における鄉村社会の教化のなかで累世同居の宗族が重要な意味を担ったことを論じており、その作業を通じて、古い起源をもつ合爨が改めて宋代に注目されたことがわかる⁽¹⁸⁾。合爨の特徴を端的に言えば、作為的に家産均分を禁止していることであり、したがって、家産均分により分かれるはずの複数の家族が一体的に共同の会計（資産、支出入）を構成し、そこに個別家族

の規模を上回る大きな集団が成立することになる。宗族全体として同居共財生活を営む特異な形態であるといつてよい。

洪武年間における弾圧の過程での解体を伝えられる宗族が、宋代以来の宗族形成の歴史といかなる関係にあるのかは、現在のところ必ずしも明かではないが、甚大な被害を蒙ったことを確認できる范氏義荘の事例を念頭に置くならば、それらのなかに、比較的早い段階に成立した宗族が含まれたであろうことを推測できる。

しかし、ここで注意しておきたいのは、宗族の解体を後世に伝えた方孝孺等、元末明初の社会を生きた人々の観察であり、彼らの観察を見ると、宗族という集団そのものが十分に普及していたとは言えないように思われる。彼らの観察の一端を紹介してみよう。

例えば、方孝孺は、合巹を挙行了した寧海県の童氏の族譜に寄せた序（『遜志齋集』巻一三、「童氏族譜序」）のなかで、

…孝弟忠信、以持其身、誠恪祠祭、以奉其祖、明譜牒、叙長幼親疎之分、以睦其族、累世積德、以求無獲罪于天。修此則存、廃此則亡、此人之所識也。而為家者鮮或行之、当其志得意滿、田園不患其不多而購之益力、室廬不患其不完而拓之益広…。

という。つまり、当時の人々（乃至その「家」＝家族）が、孝弟忠信の倫理によつて自らを律し、また祠堂における祭祀、族譜、長幼・親疎の分の確立などを通じて、祖先を尊び、血統を明らかにし、その親族の間に和合的關係を作る、こうした事業を行なうことに関心を示さず、専ら土地・家屋の増殖に奔走する風潮を批判的に観察しているので

ある。このようないわば私的利益の追求は超時代的に出現するものであろうが、檀上寛氏によれば、元末明初の時代にはとりわけ問題となったという。すなわち、元朝の身分制のもとで最下層の南人に位置づけられた江南の人々は、政治的にほとんど疎外された状態にあり、賄賂を用いて下級官吏等となるか、あるいは、政治的に立身の望みを絶たれた大多数の南人にとっては、郷村での勢力扶植の途を選ぶしかなかった。氏は彼らを利益追求型富民と呼び、明朝も、彼らの行動を政策的に規制しようとしたという。⁽¹⁹⁾この檀上氏の所説に従えば、方孝孺が嘆いた私的利益追求の風潮も、元朝以来の構造的問題に起因するものと理解しうるかもしれない。

方孝孺が私的利益追求の風潮の反面で指摘したところの、宗族形成の事業への関心の薄さは、『樓氏宗譜序』（『遜志齋集』巻一三）においても述べられている。これによれば、一郷に居住する同姓の者が族譜を閲覧して、ともに同じ祖先から分かれ出た子孫であることを知れば、少なくとも同姓のなかで、「富者」、「貴者」、「強者」が「貧」・「賤」・「弱」なる者を抑圧すること（「侵」、「凌」、「暴」）はなくなり、この関係を更に郷から「邑」、「郡」、「国」へと拡大していけば、天下の紛争は姿を消し、安定するはずである。しかし、現実には理想とはほど遠い。「親親の道息みて風俗も浸^{しだい}に衰え、一郷にして俗を同じくする者すら且つ其の本を思わず」という。ここでも強調されるのは、「富者」、「貴者」、「強者」といった経済的・身分的・社会的上位者が同郷のなかの同姓の「貧」・「賤」・「弱」なる者を虐げる利己的態度、親族関係の弱さである。

同様の認識は、方孝孺のみでなく、その師の宋濂にも見られる。宋濂（濂は諱、字は景濂）は、元朝の至大三年（一三一〇）の生まれで、金華県潛溪の人（後に、浦江県の青蘿山に移住）である。元代における金華朱子学の頂点に立つ許謙（一二七〇年—一三三七年）から教えを受け、金華学派のなかで指導的役割を果たした人物として知られ、元末、朱元璋政権に招聘されて、江南儒学提挙となり、明朝建国後には、『元史』編修の総裁官、翰林院学士、礼部主事

等の要職を歴任し、功臣として朱元璋に厚遇された。宋濂は洪武一〇年（一三七七）に致仕して帰郷するが、同一三年、孫の慎が、時に明朝によって発動された胡惟庸の獄に連座すると、彼もこれに巻き込まれて四川の茂州に流され、翌年^{（20）}夔州で死去している。

宋濂は、例えば、金華の馬氏の族譜に寄せた一文（『宋学士文集』巻四五、「題馬氏譜図後」）において、「氏族の学講ぜざる自り、士大夫の家も亦之を習う者有ること鮮^{すく}なく、往々にして未だ数世を歴^へざるに、已に藐然^{バウゼン}として何人爲るかを識らず、嘆ずべきなり」といい、後世「氏族の学」が行なわれなくなり、士大夫の家でも、祖先から分かれて数世も経たないのにお互いに見知らぬことがしばしばあるとされる。更に、「俞氏宗譜序」（同上書巻六九）において、宋濂は、かつて自ら同姓の者を教化する案を作ったことを紹介しているが、その内容は、毎月一日、「同姓」の「長少」を「先祠」に集めて祖先に拝謁し、それぞれの行いを正すこと、あるいは疾病、患難、葬喪、婚嫁、災害時における相互扶助などである。その後文に、「誠に一人之を爲す有れば、衆、其の善を見て必ず之に效^ない、效^なう者愈^いよいよ多ければ、則ち化する所の者も必ず愈^いよいよ遠^はかなり。因りて以て、天下の俗を美しくするは難からざるなり。惜しいかな、吾れ未だ之を見ざるなり」と嘆く。宋濂自身、族人集合あるいは親族そのものに対する社会の関心の低さを強く認識していたといえよう。

要するに、宋濂も方孝孺も、族譜編纂、祠堂設立、親族間の親和など、宗族形成にとって最も基礎的な事業でさえ、元末明初乃至それ以前の時代にあつては、人々が関心を示して実践するところではない、そうした世相を強く慨嘆するのである。この同時代人の観察による限り、宋代以降における宗族形成の歴史の過程で宗族が各地に普及し、その結果、元末明初の時代、宗族が普遍的に存在していた、と考えることは難しい。

(2) 挙行の時期と主体

しかし、にもかかわらず、方孝孺がその一方で洪武年間における宗族の解体を記録しているということは、言うまでもなく、宗族が当時の社会に少なからず存在していたことを意味していなければならない。このことをどのように理解すればよいのであろうか。ここで注目したいのは、濱島敦俊氏の指摘である。氏はかつて、明朝成立と地主との関係を論じたなかで、浙東地域では元末になって宗祠等の祭祀を行なう事例が多数存在することを指摘された⁽²¹⁾。氏の力点は宗族というよりは鄉村に置かれているため、それら多数の事例を具体的に分析する作業はほとんど行なわれていないが、興味深い指摘である。宗祠を設立し、祖先を祭祀することは、族譜の編纂とともに、族人を結集し、宗族の組織を形成するうえで最も基礎的な事業の一つであり、そうした事例が多数見られるということは、この時代に新たな宗族形成の動きがあったことを示唆するように思われる。かりにそうであるとすれば、解体を伝えられる宗族のなかに、范氏義荘のような早い段階に成立した宗族のみでなく、まさしく宋濂、方孝孺が親族・宗族への関心の低さを嘆いたその同じ時代において新たに形成された宗族が少なからず包含される可能性が出てくるのである。

そこで、筆者は、この問題を検討するために、宗族の解体を伝えた方孝孺の『遜志齋集』の他、また濱島氏が上掲の指摘を行うに際して用いた宋濂の『宋学士文集』、及び貝瓊『清江貝先生集』⁽²²⁾、この三人の文集に依拠して、別表「宗族形成事例表」を作成してみた。方孝孺と宋濂の略歴はすでに紹介したが、貝瓊（瓊は諱、字は廷臣）は、嘉興府崇德県の人であり、元末の群雄の一人である張士誠が蘇州に拠点を構えたと、しばしば彼を招聘したが、これに応じなかったとされる。洪武初になって、宋濂が総裁官を務めていた『元史』の編纂に参画し、洪武五年（一三七二）国子助教、同八年、中都鳳陽府の国子監の助教に改められた後、洪武十一年に致仕し、その翌年に亡くなっている。ほぼ

宋濂と同じ時代を生きた文人であるといつてよい。⁽²³⁾

さて、別表では、族譜編纂・祠堂設立、義荘、合爨の事業を行っているかどうかを目安として事例を収集した。宋濂等が伝えるところの宗族の事例は、明代の行政区画で示せば、南直隸、浙江、安徽、江西、福建、広東の諸地域に及ぶが、このうち、本稿で対象としている浙東・浙西は、南直隸と浙江の領域に属す。浙東・浙西における宗族形成の事例の総数は五十一例、それらの事業が行なわれた地域を見ると、浙東に片寄っていることに気が付く。浙西では、応天府（溧水県、句容県）、常州府（江陰県）、嚴州府（壽昌県）、嘉興府（崇徳県）。浙東では、紹興府（諸暨県、上虞県）、金華府（金華、東陽、浦江、永康、麗水、義烏の諸県）、台州府（寧海、天台、黄巖の諸県）、寧波府（象山、慈溪、奉化、鄞の諸県）、処州府（龍泉県）、温州府（平陽県）、衢州府（開化県）などである。事例数で言うと、浙西が七例、浙東が四四例であり、圧倒的に浙東地域に集中している。これは、宋濂、方孝孺、貝瓊の三人のうち、より多くの事例を記録している宋濂と方孝孺が浙東地域の出身であることと関係があるように思われる。宗族形成の事例は、知人、弟子などから求められて著した族譜の序や墓誌銘の類の資料から知られるものであり、浙東出身である彼らの交友関係の基盤がおそらくこの地域にあつたであろうことを考慮すると、それらの文章に記録された宗族形成の事例も、浙東のものが多くなる結果となつたと考えられる。⁽²⁴⁾

次に、関連の事業が舉行された時期に目を向けてみよう。別表での収集の結果によれば、諸例の中には、比較的早い時代に宗族関係の事業を舉行したものが含まれる。例えば、浦江県の義門鄭氏（No.46）は南宋の時代に合爨を開始して以後持続されてきたものであるし、諸暨県の黄氏も宋代に義田を設けた経験をもつ（No.33）。また、永康県の呂氏による義田・義学の設置（No.8）、樂善堂なる建物を「歲時族を合するの所」となした黄巖県の張氏の事例（No.29）、龍泉県の湯氏による義田設置（No.36）、更に慈溪県の羅氏の合爨（No.50）、天台県の顧氏による「其の族を合する」の

挙(No 51)、これらはともに、元末以前のことである。ところが、その他の事例では、宗族形成の事業は、そのほとんどが元末明初期に挙行されている。また、比較的早い時期に関連の事業を行っていた前掲の諸姓のなかで、永康県の呂氏や黄巖県の張氏などは、元末明初期になって従前の事業の整備・復興を試みている。濱島氏の指摘がほぼ妥当なものであることを確認できるであろう。

では、宗族形成の事業を行なったのはいかなる人々であつたのか。宗族形成の事業は、族譜編纂、祠堂設立などによる族人の結集、あるいは義荘、合爨いづれの方法をとるにしろ、誰にでも容易に実現できるものではない。共同祖先を定め、祖先と子孫との関係を明らかにし、また族人間の結束を維持するうえで必要とされる儒教倫理を族人に習得させるなど、宗族を作り上げようとする場合には、儒教的教養に基づく高い知識を要求される。そのみでなく、これらはまた、相当の資本の投下が不可欠の条件であり、とりわけ族人の生活面の保証をも含む合爨、義荘の場合には、それを支えるに足る強力な経済基盤を求められる。これらの条件を満たすことのできる家は、当時の社会にあつて、本稿で地主・士大夫と呼ぶ階層が該当する。方孝孺が言うところの「鉅室故家」、「大家富民」である。別表の「事業主体」の項目を参照していただきたい。それによれば、元末明初期、各種の宗族形成事業を実行したのは、元末の地方下級官吏(例えば、照磨、経歴等の職)、儒学教官、建国以前の朱元璋政権及び明初の官僚(翰林院所属の諸官・六部の侍郎・主事などの中央官、参議・知県・主簿などの地方官、また国子助教、武官)と国子監生等、この他、処士と呼ばれる一般の読書人などである。このなかには、元末に下級官吏・儒学教官であつて、後に明朝に採用された者もある。また、本人のみならず、彼らの祖父・父、あるいは子や孫など三、四世代の範囲を視野に入れた場合、以下の諸姓において、元朝乃至明朝の官僚機構と接触をもっている。例えば、①元末と明初の両時期に任官者を出している家(No 2の方氏、No 5の呉氏、No 8の呂氏、No 13の林氏、No 18の祝氏、No 25の張氏、No 30の陳氏。また、南宋以

来、合纂を継続しているNa 46の鄭氏の場合も、元末明初期、任官者多数)、②元朝に任官した家(Na 17の柳氏、Na 27の張氏、Na 28の張氏、Na 36の湯氏、Na 44の蔣氏)、③明朝に任官した家(Na 9の宋氏、Na 23の桂氏)などである。²⁵⁾要するに、彼らは、租佃経営を主要な経済基盤としつつ、同時に儒教的教養を保持して、元末明初期、当時の政治情勢の変化に乗じて国家の官僚機構に進出していった地主・士大夫層に所属する人々であったと考えられる。次に、元末明初期の地主・士大夫によつて挙行された宗族形成の試みの内容を具体的に紹介してみよう。

なお、以下、別表に基づいて、諸例を紹介するに際しては、それぞれ別表の番号を記すので、典拠も、別表の「史料来源」の項を参照していただきたい。また、地名については、明代の行政区画に依拠するが、内容に応じて元朝治下での名称も用いる。

二 族譜編纂と祠堂設立

族人を組織化して、宗族を形成するには、いくつかの手続きが必要とされるが、最初に問題となるのは、共同祖先の確定である。共同祖先をどこに設定するかによつて、結集すべき族人の範囲が異なり、宗族の規模もそれに応じて変わることになるからである。宗族形成の動きが始まった宋代、大宗主義に立つ程頤は、始祖つまり伝えられるところの最も最初の祖先を立春に祭ることを提唱しているが、²⁶⁾その場合には始祖以下の子孫の全てが集合の対象となる。

しかし、始祖を決定すること自体容易なことではない。別表に掲げた諸姓で言えば、一々事例は挙げないが、しばしば唐代、漢代などはるか昔にまで祖先を追跡する努力がなされているものの、それらの大半は、それらの時代から族譜等の記録をもっていたわけではなく、それが本当であるかどうかは確認しようがない。²⁷⁾宋濂、方孝孺とともに、元末明初期の族譜には、少なからず祖先を偽るものがあることを批判しているが、そうした傾向はとりわけ宋代以前の

遠い時代の祖先に顕著であろう。また、始祖を確定できたとしても、始祖はしばしば十数世代、数十世代も遡ることになるから、始祖から分派したきわめて多数の族人を捜し出し、集合することは、これまた極めて難しいことである。おそらくそうした事情もあつてのことであろう、宋代に有力であつたのは、考（父）・祖（祖父）・高祖・曾祖の四代の祖先を祭り、その範圍の族人を集めることを唱える説（小宗主義）であつた。⁽²⁸⁾

元末明初の時代においては、始遷祖（宗族形成の事業を試みた者が居住する土地に最初に移住してきた祖先）を共同祖先とする見解が登場している。方孝孺が、その族人（「宗人」）を対象として著した「宗儀」、〈尊祖〉（『遜志齋集』卷一）のなかで述べたものがそれである。

立祠祀始遷祖、月吉必謁拜、歲以立春祀。族人各以祖祔食、而各以物来祭、祭畢、相率以齒会拜而宴。

祠堂で祭るべき族人共同の祖先として、始遷祖を設定しているのである。始遷祖の子孫たる族人は、当該の祖先以来、同じ土地に居住してきた者であるから、始遷祖及びそれ以降の祖先についての情報も集め易く、また、同郷に住む族人と連絡をとるのも比較的容易であつたと考えられる。別表のうち、明らかに始遷祖を認識しているのは、方孝孺の一族（No 2）、金華県の張氏（No 26）、天台県の陳氏（No 31）、東陽県の蔣氏（No 44）、象山県の謝氏（No 47）などである。

始遷祖等の共同祖先を決定し、それから分派した族人を集め、相互の結束を固めるうえで重要な事業は、祠堂の設立と族譜の編纂である。⁽²⁹⁾方孝孺の上掲の規定からも窺われるように、祠堂を設けて共同祖先を祭り、また祭祀の儀式に集合した族人の間で宴会などを開くことを通じて、族人は共同祖先と自己との関係を確認し、かつ共属意識を高め

ることができる。また、同じく方孝孺の「宗儀」、△重譜▽に、

尊祖之次莫過於重譜。由百世之下、而知百世之上、居閭巷之間、而尽同字之内、察統系之異同、辨傳承之久、近叙戚疏、定尊卑、收渙散、敦親睦、非有譜以爲列之、不可也。故君子重之、不修譜者、謂之不孝。

とあるように、族譜編纂も重要な事業の一つである。族譜の基本は、共同祖先から分派した子孫の血脈の広がりを書に記録することであり、それにより、祖先と子孫との関係、族人相互の関係、族内の尊卑の序列（世代・年齢を基準とした序列）などは明確化される。

祖先の決定、祖先を祭る祠堂の設立、族譜の編纂、これらの作業を通じて、族人を集合して宗族を形成する基礎的条件が備わることになる。別表に示したように、元末明初期、地主・士大夫が試みた宗族形成の事例のなかで最も多数を占めるのも、この形態であり、総数五一例のうち、三四例を数える。例えば、宋濂によれば、金華の俞氏は「書詩を以て其の家を世よにし、科第に擢せらるる者先後して相望む」というように読書人の家系であった。恂なる者の父はとりわけ学問を好み、「其の同姓の親を譜して以て其の族を聯ぬ」といい、譜の編纂を媒介として族の結集を図った。恂もまたこれを受け継いで「譜を完く」したとされる。宋濂はこのような譜の編纂を「族に睦むの本なり」とみている（No16）。また、祠堂設立の事例では、天台県の陳氏がある。陳氏では、その祖先が婺州（金華府）から移住して明初の秉彝の代までで十余世を経ており、族人の戸数も百家に近いほどになっていた。かつて秉彝の祖父は祠堂を作り、始遷祖を祭り、「族人をして祭りを合わせ、以て其の心を維繫がしめんと」したが、元末の戦乱により祠堂は破壊され、父の彦聖も祠堂を新築する志しを抱いていたものの実現できなかった。明朝の洪武一〇年（一三七七）、秉彝

は先人の志しを受け継ぎ、祠堂を故址に建て、また若干畝を拠出して祭祀の用となし、族の宗子（おそらく始遷祖嫡系の子孫）に祭祀を主宰させたという（No.31）。この二つは、族譜編纂、祠堂設立とともに、族人結集を目的とするものであることがよくわかる事例である。

さて、別表に提示した事例のなかには、族譜編纂・祠堂設立にとどまらず、族人相互の結束を強めるために、より充実した事業を行なったケースがある。以下、いくつかの事例を紹介してみよう。

東陽県の蔣氏の家は、元朝治下において官僚機構との関係が深い。諱を沐という者は、元朝の時に南康路建昌県主簿、その子の吉相は仁宗に仕えて典用監知事に拔擢され、後に襄陽路穀城県尉となる。吉相の子は玄（字は子晦。至正四年―一三四四―に死去）であり、北京に生まれ、父に従って穀城に住んだ後、東陽に帰郷し、許謙に従学している。玄の墓志銘には、彼の善行が伝えられているが、これは地主と小農民との関係を示す史料として、周藤吉之、濱島敦俊両氏により注目されたものである。⁽³⁰⁾ それによれば、当時、東陽には「宋の貴臣の族」が多く、その土地を佃作する「民」から、五割の分益租のみならず、副租として生糸を徴収していたが、玄は生糸の徴収を廃止し、また「細民」に無利子で穀物を貸与し、絶えず数十家が玄の家を頼っていたとされる。蔣玄が租佃経営を行なう地主であることは明かである。また、その祖父・父ともに元朝治下で任官しており、玄自身は任官こそしなかったものの、許謙から儒教知識を伝授された儒者であり、読書人の家柄であるといえよう。その子の久升は推挙により、慶元路儒学教官を授けられている。

彼は「礼を以て其の家を斉う」を重んじ、「先祠」を奉じて朱子の儀文（『家礼』⁽³¹⁾）に基づく祖先祭祀を執り行うとともに、歳時には族人を率いて始遷祖の墓を祭り、祭りが終われば、族人は長幼の序により列坐し、「親睦の道」を確認した。族中の近親者は毎月朔望には必ず集まったが、そのうち貧者には二ヶ月分の穀物を支給し（「貧者歳周以兩月

之粟」、また祖父によって創設された「義塾」を運営し、儒者を招いて子姓を教育した。始遷祖の祭祀の挙行を通じて、族人間の結束を計り、かつ族人の救済・教育に力を入れている。(No.44)

金華県の蒼唐山に住む「著姓」張氏の始遷祖は諱を隆、字を享仲という者であり、南宋の建炎年間(一一二七年―一一三〇年)の初めに睦州(嚴州府)から移住し、当地の潘氏の贅壻^{いりむ}となるが、後に張姓を回復した。隆には三子があり、その子孫は三つの支派(「三族」)に分かれた。また、「其の出で仕うる者は既に文墨論議を以て著しく時に称えられ、而も家に退修せし者も亦、循環として雅飭、士君子の行いに愧じる無し」といい、官僚を送り出す名族としての家系を誇る。始遷祖の隆から数えて六世の子孫である栄は、先祖の霊を安んじる所がないのを嘆いて、族弟の琰^{ぎん}等とともに、始遷祖の隆、隆の三子(「三族」の房祖)を祭る祠堂(「先祠」)を設立した。また、東西各地に分散している族人の不便を考えて、ただ正月においてのみ彼らを祠堂に集め、その別室で催される会合の席で、「長幼を叙」した。そして、新たに生まれた子供で、命名が済んでいれば、これを「譜図」に書き込んだ。更に、祭田の佃租収入の管理を「三族」の嗣人(房祖の祭祀を継承する者)が交替で行なうこととされた。この「宗族を聚合する」の挙は、元末の至正一五年(一三五五)冬に始まり同二六年に成就したが、「一宗の長」たる栄はこの時、「宗人」数百人を率いて儀式を挙行、「観る者」は「邑の未だ観^みざる所なり」と喜んだという(No.26)。

平陽県蓋竹の林氏は、簋^きなる者の時から当地に住むようになったが、「子孫、今に至りて數百家、郷閭に散処し、服微^{かみ}かにして情弛むこと久し」というように、簋の子孫は増加したものの、相互の関係は長い間疎遠であった。そこで、第十二世の子孫で、元朝の陽江県尹に任じられた淳は、「其の愈より遠くして、自り出づる所を知らざるを懼」れ、始遷祖簋の墓の傍らに祠堂を建てようとしたものの、果たせぬままに亡くなった。明朝になって、淳の子の刑部主事の陞は、父の遺志を継いで祠堂を建設し、簋の神主を奉ずるとともに、毎月朔望の拝謁、歳時の祭祀はともに、

「一族の人」を率いて挙行した。また祠堂の後ろには思孝斎を建てて族人会合の場とし、あるいは祠堂の左側に祠を設けて朱子の像を祭り、祖先、父を配祀した。更に祠堂の前には学校（「学」）を設け、「郷人の賢者」を招いて師となし、「族人の子弟」を就学させた。宋濂はこの林氏の挙について、「疏なる者は以て親を復すべく、遠き者は以て散ぜざるべく、富強なる者は必ず敢えて是を以て其の身を私せず、而も貧弱なる者は必ず濟きゆうさいを仰ぐ所有り。其の族、寧んぞ壊るる有らんや」と述べて、族人の結集、私心の抑制、救済の効果を評価している。（No 13）

金華の張氏、平陽の林氏のケースに示されるように、族人（及びその家族）は、平生瀕繁に往来することが可能な地域に集まっているとは限らず、また同じ郷里に住んでいても、そのなかで各処に分散して独自の会計を営んでいたと考えられる。これらの分散した族人を集めるうえで、祠堂建設あるいは族譜編纂の他、定期的な祖先祭祀、族人の教育を目的とした学校（義塾等）の設置、族人の救済などをあわせて実施すれば、単に祠堂設立・族譜編纂を行なう場合に比べて、族人の相互の親密さを深められることが期待される。次に扱う義荘は、これらの宗族の諸機能を更に充実させた体制をもっている。

三 義荘

義荘はすでに宋代以来の伝統をもっており、いわゆる正学派の士大夫として慶暦の改革を指導した范仲淹（九八九—一〇五二）が父祖伝来の地である蘇州で設立した義荘をその創始とも言われる。范氏義荘についてはすでに旧稿⁽³²⁾で検討したことがあるので、ここでは、旧稿に基づいて、その特徴を記すにとどめたい。

創始者の范仲淹は慶暦年間（一〇四一年—一〇四八年）蘇州呉県の西に位置する天平山麓の白雲寺を祖先追福の地となして曾祖・祖父・父の位牌を祭った後、皇祐元年（一〇四九）、知杭州となった時、呉・長洲両県で田十余頃を取

得して義田となし、また義田収益の支給に関する規矩を定め、併せて義宅、義倉、義学を設置した。これが義荘の始まりである。義荘における宗族組織の主要な経済基盤は、家産均分の対象とされない義田からの佃租収入にあるが、義田・祭田などを合わせた義荘所属の共有地の規模は、南宋の理宗嘉熙四年（一二四〇）の段階で、官側の資料によれば、合計で三一六八畝余りであり、当初の三倍の規模に達する。

その義荘の特徴は次のようなものである。① 共有地からの収益は、各施設の維持に用いられる他、仲淹の四子それぞれが房祖とする四房を始めとして合計一六房に属し、蘇州に在住する族人を対象として分配される。五歳以上の族人に対して一人当り毎日一升の割合で白米を給付し、また冬衣を支給すること、あるいは婚姻・喪葬などの費用や科挙受験への援助などが主な収益分配の内容である。② 義荘の運営は、年長で「賢」たることを条件として選出された掌管人が主宰したが、南宋の咸淳一〇年（一二七四）には、主奉（＝宗法における宗子）が設けられ、祖先祭祀の主宰者としての主奉が義荘運営の最高責任者の地位を兼ねて、范氏宗族全体を統率する体制が整えられている。

范氏義荘は北宋の開設以来、元末にいたるまで幾たびかの危機を乗り越えて存続したが、そのみでなく、官界との接触も緊密に維持していた。乾隆刊『范氏家乗』巻一〇、「登進志」によれば、范仲淹の世代以降、宋代の間において、科挙及第者、科挙による任官、恩蔭による者など、合計一三〇人が科挙官僚制度と関わりをもっている。⁽³⁴⁾ さらに、元朝においても、范氏は官界との関係を保っている。同じく「登進志」では、元朝について、郷貢進士一人を含めて一七人を登載している。⁽³⁵⁾ 任官者の多くは諸路の儒学の教授・学正・訓導、県の儒学教諭、及び書院の山長などであり、この他、諸県の主簿、行用庫副使の職名がみえる。このように、儒学教官、書院山長、地方の下級官吏を送りだした范氏は、全体としては科挙による任官の道が実質的にほとんど閉ざされていた元朝のもとでの江南士大夫と官僚制との関係を如実に示す一つの事例といつてよい。そして、かかる官僚制との関わりは、范氏の宗族が任官者を国家に送

り出すという体質を元朝においてもなお保持していたことを物語るであろう。

范氏義荘はこのように、義田という宗族共有財を永代的な経済基盤として宗族集団を維持した点に基本的特徴があり、蘇州在住の族人に対する恒常的な義田収益の分配により、経済的側面において族人を宗族につなぎとめることができるのみならず、義学の設定、科举受験者への援助など官僚機構へと人材を送り出す機能も充実している。

范氏義荘の創始以来、范氏を模倣して義荘を設立する風潮が巻き起こっていることは、すでに清水盛光氏が検討しているところであるが、江南における義荘設立の風潮を物語る史料として、南宋の劉宰の「希墟張氏義荘記」(『乾隆・金壇県志』巻十、記)を掲げておきたい。この一文は、義田四百畝を設け、申義書院を設立して「族の子弟」を教育した希墟の張氏について記すが、そのなかで、

近世名門鮮克永世、而范公之後独余二百年綿十余世、而澤不斬也。自公作始、吳中士大夫多倣而為之。

という。当時の士大夫は、長期にわたって存続する名門の家系が少ないなかで、范仲淹以来二百余年、義荘を維持し、名門としての家格を保った范氏を模範として、相繼いで義田(義荘)を設けたとされるのである。

宋濂等が伝える宗族の事例のなかにも、いくつかの義荘を見出すことができる(合計で五例)。最も早期の事例としては、宋濂が諸暨県の黄氏の族譜に寄せた序のなかで伝えた事業がある。それによれば、宋朝の時、黄振(贈衛尉少卿)の妻の劉氏は、「劉氏、嫁貨を斥ぞけて、以て義田を規り、均しく娣族に給す。故に其の三子十孫、多く臚仕(厚禄を受ける官)に躋る」とあるように、嫁貨を資本として、嫁ぎ先の黄氏の一族を対象とした義田を設けて、一族に収益を分配し、これにより、黄氏の子孫には任官者が輩出したと伝えられる。その筆頭に挙げられるのは育(広南西

路の提点刑獄使）であるが、また、彼の從子の汝楫（朝請郎）に八子あり、そのうちの五人は科擧及第を果たしている（No 33）。黄氏の義田設置も、当時における義荘設立の風潮のなかで行なわれたもののように思われるが、この事例を通じて、義荘という宗族組織が官僚を送り出す機能を有していたことを確認できる。ちなみに、当該の族譜の序は、劉氏によつて設置された義田がその後どのようなものかは伝えておらず、明初になって、ようやく振の子孫の周が族譜を編纂したことを記すのみである。後述するように、義田（義荘）の維持は極めて困難な事業であり、しばしば崩壊していることを念頭に置くと、おそらく劉氏によつて設置された義田もその後消滅したのではないかと推察される。

元末明初期においては、次のような事例が伝えられている。

処州府龍泉県の湯氏。宋代に武翼大夫の大節なる者あり、その子は望、望は父の恩蔭を弟に譲つた。望の子を鏞^{ヨウ}と言ひ、時に宋朝が倒壊すると、若くして隱居生活に入り、「義を行ひ、田二百畝⁽³⁷⁾を置き、以て同族を贍^{たく}う」とあるように、二〇〇畝の土地を設置して族人を救済した。これが、湯氏における義荘の開始である。この義荘が発展を遂げるのは、鏞の子の京の時代においてである。京は、字を師尹⁽³⁷⁾といい、元末の至正八年（一三四八）に世を去っている。京は才能に優れ、州学に入つて、一旦は科擧を目指したが、後に科擧の道を退けて医道を志し、仁濟堂という医院を開いている。また、京の兄は濱といい、その子の楷は龍泉県学教諭に任じられた。京が兄の濱と共同で行なつた事業は、父以来の義田の増殖（それぞれ一〇〇畝を抛出）、睦順堂及び立本・義原の二齋からなる施設の整備、義塾の設置と一族の優秀なる子弟の教育（合群族俊彦、聘碩師誘迪之）、義田からの佃租収入を貯える倉の建設と族人への分配（旁列廩庾、以貯田粟、俟時而分給）などである。時に、湯京は、婺州の儒者の季仁寿を「一郡の望」とみなし、義塾の師として招いている。季氏は後に婺州路儒学教授に任じられた。⁽³⁸⁾（No 36）

金華府永康県太平里の「大族」呂氏。呂氏の始遷祖は、河南から移住してきた玖キョウなる者であり、その玄孫は浩、また、浩の弟は源といい、「義を行なう」により、朝廷から旌表された。源の玄孫の鑰ヤクは元朝に仕えて永康尹となり、その子は汲、孫は機、曾孫は文燧ブンスイという。

文燧（字は用命）の時代には、元朝が弱体化する形勢のもとで、各地で様々な反乱が勃発しており、浙東でも、至正年間（一三四一年—一三六八年）の末期、処州から発生した反乱軍が永康県城を陥落させるという大事件が起こっている。この時、文燧は、「家資数千萬」を醸出し、弟の文燾ブンヨウとともに「里の壮強の子弟」三千人を集めて義勇軍を結成し、県城を回復した。元朝の大臣はこの挙を義として門閭を旌表し、差役を免除している。「婺（州）の巨室・細民、幸いにも盜に遇わざるは、悉く功を呂氏に帰す」という。莫大な資産を抱え、かつ郷里にも絶大な影響力をもつ家であつたといえる。その後、朱元璋が婺州に進軍し、この地域を支配下におさめた時には、文燧の族人が彼の名前を用いて朱元璋の幕下に降り、これを喜んだ朱元璋は特に永康翼を設けて文燧を左副元帥兼知県事に任命したものの、当時所用により文燧は杭州に滞在していたため、代わって弟の文烜ブンケンがその職を受けた。文燧が帰郷すると、庸田司經歷などに任じられ、更に浙西の地域が平定されると、嘉興知府に就任し、洪武三年（一三七〇）に亡くなっている。

呂氏でも、義莊を設立している。文燧の祖父の汲は、「嘗て上世立つる所の義田を修め、以て族人に食せしめ、学を置きて以て子姪に教う」という。義田による族人救済と義学による教育である。「君に至りて、其の志しを踵ツグぎ、卒に之を成す」とあり、文燧はその志しを受け継ぎ、更に義莊を整備したものだと思われる。元末、朱元璋が婺州に進攻した際、族人が文燧の名前を用いて朱軍に加わったという前掲の事件には、文燧の家と族人との緊密な関係が窺われるが、その背景には、義莊を中心とする宗族の結合が存在したと推測される。（No 8）

貝瓊は、寧波府鄞県の韓氏について記している（No 48）。韓氏は代々定海県（寧波府）に住んでいたが、後に鄞県に

移住した。韓処士（諱は性、字は可善）なる者は、元朝の延祐六年（一三一九）に生まれ、明朝の洪武八年（一三七五）に死去しており、元末明初の人である。その曾祖、祖、父は、ともにただ「某」とだけ記されていて、名前は不詳であるが、父は妙心居士と号したという。処士は貧民に対する救済に心をくだいた人であり、貧しい人が婚姻や喪葬に際して困っていたら、必ずその門を訪れて助けた。また、郷人のなかで税糧・佃租を滞納している者があれば、代わって納入したという善行も伝えられている（郷人有公私通不能償、為代輸之、卒竟不責其帰）。このような積善の行いにより、郷人は皆、処士を「長者」と呼んだというから、人々の信望も厚かったと思われる。

処士は、「規りて田若干畝を置き、義莊を為り、以て族人を収め、義塾を建て、以て子弟を教う」とあるように、義田の設置、及び族人を収容する義莊、族人の子弟の教育を目的とした義塾などの設立、要するに広い意味での義莊の機構を樹立した。それとともに興味深いのは、処士が義莊設立のみでなく、合爨の試みも行なっていることである。

処士には腹違いの兄がいたが、兄は処士に冷たく、彼を他人のように扱った。「家は素より質に饒かなり」とあり、韓氏はかなりの資産家であったようだが、処士が成人して「異居」した折り、兄は家産の一、二割しか処士に分与せず、人々はその「均しからざる」を心配した。しかし、処士は不満をもらさなかったばかりか、兄によく従った。時に、義門鄭氏の一門に属す浙西廉訪司僉事の濬が処士の家を訪れて、『麟溪集』⁽³⁹⁾をもたらすと、処士は「感じて之を慕い、子孫の法と為」し、「其の兄をして能く其の心を推さしむ」といい、その兄にも勧めて、合爨を実現したのである。この結果、韓氏は、「一門の孝友、風俗既に壞るるの余に見れ、卓然として東南の望と為る」という。韓氏にあっては、合爨によって近親者を集合するとともに、義莊の設立を通じて、より広い範囲の族人を結集しようとしたと考えられる。

以上いくつかの事例を通じて見てきたように、義莊設立はおおむね、地主・士大夫が自己の家産のなかから一部を

抛出して、これを宗族の共有財（義田等）となし、この共有財を経済基盤として、祖先祭祀、族人の日常生活の保証ないし救済、教育などの諸事業を遂行することにある。それらの事例が、范氏義荘を直接的に模倣したものであるのかどうかは確認できないが、義荘設立の状況、義荘の諸機能はほぼ范氏のそれと同じであるといつてよい。とりわけ注目すべきは、大抵の事例において学校（義塾など）を設けて族人の教育に力を注いでいる点であり、これもまた、多数の官僚を送りだした范氏のそれに共通する特徴であろう。

四 同居共財（合爨）

これまでに紹介した族譜編纂・祠堂設立を基本とする事業、義荘の設立は、共同祖先以降、各世代ごとに家産均分の慣行を契機として析出され、独自の会計を営む多数の個別家族（族人）を作為的に組織化する宗族形成のあり方であった。前者にあつては、祖先祭祀、祖先の系譜の再現、祖先と子孫との関係の明確化を通じて、空間的にも隔てられている族人の家族を集合することが基本であり、更に、教育・救済の機能を充実させているケースもある。後者は、それらの事業に加えて、家産均分の対象とされない宗族共有財として義田を設け、これを永代的な経済基盤として族人の日常生活を保証し、また教育を行う。永代的な経済基盤をもとに、長期にわたる宗族体制の維持を意図したものであるといえる。

これに対して、宗族のいま一つの形態である合爨の場合には、宗族の形成は、兄弟等の近親者が家産均分の禁止に合意した時点から始まり、その後、彼らの子孫が増大するにともない、宗族の体制が整うことになる。したがって、前二者のように、事業開始時点において、すでに共同祖先から分かれた多数の族人の個別家族が集合されているわけではない。また、後で掲げるように、兄弟等近親者の他に、より広い範囲の族人を集合したと推定される事例もある

が、その集合の範囲は限られていたと思われる。元末明初期における合爨の具体的状況は次のようなものである（総数は一三例）。

当時、とくに著名であったのは、南宋の淳熙年間（一一四六年―一一八九年）、鄭綺なる者（冲素处士）によって開始された浦江県の鄭氏の合爨である（No.46）。すでに檀上寛氏は、国家支配と郷村の秩序維持との関係を探る立場から、鄭氏の合爨に注目し、その合爨開始から元末明初までの鄭氏の動向を明らかにしているが、それによれば、鄭氏がとりわけ世の中に知られるようになるのは、元末明初の時期である。すなわち、元・明両王朝から、義門として旌表され、徭役免除の特権を与えられるとともに、宰相脱脱を中心とする南人グループに属した元末、そして、新たに成立した明朝の政権下において、連統的に任官者を出していった⁽⁴⁰⁾。

方孝孺は、こうして国家から手厚く処遇され、人材を国家に供給した鄭氏について、「鄭氏は世家なり、持身範家の法は、人以て三代の意を得ると為す⁽⁴¹⁾」といい、鄭氏を「世家」として賞賛している。また、当時、鄭氏の名声は、浙東、更に、天下に鳴り響いていたともいう⁽⁴²⁾。そうした名声の流布にともない、とくに鄭氏の方法を模倣して、合爨を開始する家も出現するようになる。例えば、寧海県の童伯礼の兄弟の場合、彼らの間で家産分割を禁止したうえで、一族の合爨を挙行し（「兄弟義不忍析、聚族而居」）、更に祠堂設立、族譜編纂の事業も行ったが、孝孺は、伯礼に宛てた書簡⁽⁴³⁾のなかで、童氏が鄭氏のそれを模範としたことを伝えている（No.37）。

やや詳しく合爨開始の有様がわかる事例としては、浦江県深溪の王氏のそれがある（No.3）。深溪王氏の遠祖は烏傷（金華府義烏県）の鳳林から当地に移住してきたと伝えられ、南宋の時代には、諱を萬、字を処一という者が嘉定六年（一二二三）の科挙に及第し、太常少卿となっている。彼の弟の子孫のなかに、元末の至正元年（一三四一）に亡くなった澄（字は徳輝）なる者がいる。周藤吉之、濱島敦俊両氏が、前掲蔣玄の事例とともに、元末の浙東におけ

る租佃関係を知る手がかりとして注目した王澄の墓誌銘（宋濂「元故王府君墓志銘」⁽⁴⁾）は、この地域では五割の分益租が一般的であること、また「富民」の土地を租佃する農民が佃租を滞納すれば、佃権を剝奪されることともに、そうした慣習のなかで、王澄が更佃を行なわなかったという善行を伝えている（裏人無田藝富民之田、而中分其粟、乏力者、粟輒不登、在他人必易藝者。府君卒不變）。このエピソードから、王澄の家もまた、租佃経営を行なっていたことがわかる。

王氏において合爨が始まったのは、澄が、「家衆」に対して「汝曹、族を合せて、同里の鄭氏の如くする能へば、吾れ瞑目して憾みなし」といい、鄭氏を模範とした合爨の挙行を遺言したことを契機とする。澄には子覚・子麟・子偉の三子があり、これに彼らの諸子などを合わせると、当時、澄の子孫は合計で二〇人をこえるほどになっていた。また、王澄の三人の娘のうちの一人は義門鄭氏の渙なる者と結婚しており、おそらく鄭氏と姻戚関係にあることからであらう、すでに王氏は鄭氏によって定められた規範をもっていた。父の遺言を受けた子覚は、「子姓」（具体的には、上記の近親者を指すと考えられる）を招き、「族を収めて聚居せん」ことを提案、これを受けた彼の長子の応らは、子覚に対して鄭氏の規範を損益して「家則」を制定するように願うとともに、これに基づいて同居生活を挙行了した。明初の時点で、合爨を構成する王氏の族人は百人を数えたという。ちなみに、王応は洪武年間、鄭氏の湜^{シヨウ}の推挙を受け、参議の職に拔擢されている⁽⁴⁵⁾。

諸暨県孝義里の呉長卿（長卿は字、諱は宗元）もまた、鄭氏に倣って、合爨を試みている（No.6）。呉氏の始遷祖は泗^シなる者であり、北宋の崇寧年間（一一〇二年—一一〇六年）、諸暨県開化郷の峽上から孝義里に移り住んだ。始遷祖の後、「世よ顕人有り」といい、名門の家柄を誇るが、長卿の曾祖の蘭、祖父の元祐、父の護は、ともに官僚機構とは関係をもっていない。長卿は、父の死後、よく義母の斯氏に仕え、その孝を讃えられた。後に義母も亡くなると、「唯

だ子孫に教えて析居するなからしむれば、乃ち以て先志を継ぐべし」と思い念じ、時に、浦江の義門鄭順卿の家の「世同爨」を聞くと、わざわざ赴いて、鄭順卿から「家範」（後掲の『鄭氏規範』のことであろう）を授かる。鄭氏の「家範」に基づいて合爨を舉行すること十数年に及び、大きな成果を上げたという。長卿は自らも「家教」一篇を著して、益々同居共財の生活を堅持し、明朝の洪武二年（一三六九）、八十八歳で亡くなる間際には、「義居して分たざる」とを家人に命じている。

また、浦江の黄氏の場合、元末の至正年間（一三四一年—一三六八年）、諱を珪という者あり、珪の三子のうち、隆と生はそれぞれ、逢原、逢吉・逢昌の子をもうけ、後二者の諸子を合わせると、黄氏の家族員は三世代で合計十余人を数えた。時に、浦江で「義居を以て聞ゆる者、二三人」、なかでも南宋の綺以来の鄭氏はすでに十世を重ねており、黄氏とくに逢吉が中心となって鄭氏に倣った合爨を舉行した（No 34）。義荘の設置と併せて合爨を行った前掲の鄭県の韓氏も、鄭氏を模倣したことが明確な事例である（No 48）。

以上は、別表に掲げた合爨の事例のなかの数例に過ぎないが、元末明初の時代、合爨の生活を長期にわたって守り続けてきた義門鄭氏の名声が広く伝わり、鄭氏を模倣しつつ、家産均分を禁じて、兄弟等近親者の間で合爨を舉行する地主・士大夫の家が相繼いだことを知ることができる。

しかし、これらとともに、元末明初の時代に開始されたばかりの事例であり、また資料上の問題もあって、その構造がいかなるものであるのか十分に把握できない。そこで、合爨の基本的特質を理解するために、元末明初期、少なからざる家が模範とした浦江鄭氏に焦点を当ててみたい。

鄭氏の合爨の内容は、元末明初期に成立した『鄭氏規範』⁽⁴⁶⁾（『学海類編』本）によって詳しく窺うことができる。檀上寛氏は、『鄭氏規範』のうち、鄉村関係の条項を詳細に検討しているが、ここでは、鄭氏における合爨の構造自体に

関わる内容を紹介する。なお、『鄭氏規範』は合計一六八則の条項から構成されている。以下、史料の提示に際しては、第一則から第一六八則までの番号を付す。

〈組織〉 合爨の構成員は家衆と称されるが、彼らを統率するのは、宗子と家長である。宗子の役割は、祖先の祭祀を継承し、それを通じて家衆を統率することにある。宗法におけるそれであり、いわば家衆統合の象徴的存在といつてよい。家長の方は、家内のあらゆる実務を掌握し、子弟に職務を分担させることが明記されており、合爨運営の実質的な総括者である。⁽⁴⁸⁾ 家長を補佐する職としては、典事が設けられている(第二三則)。また、家長に率いられる家衆相互の関係は、宗族一般の通例と同じく、輩行(世代)と年齢を基準とした尊長―卑幼の序列であり、目下の者(「卑幼」)は目上の者(「尊長」)への絶対的服従を求められる。⁽⁴⁹⁾

〈資産〉 鄭氏の資産の問題は、すでに檀上寛氏によって論じられているが、改めて確認しておきたい。当時、鄭氏は、一頃五十畝を祖先祭祀用の土地(祭田)として所有していた他、嘉礼荘一所を設け、田一五頃からの佃租収入をその維持に充当し、婚姻の費用に備えていた(第五、七四則)。鄭氏が全体としてどれほどの土地をもっていたのかは不明であるが、明初において、七頃以上の土地所有者は、国家から「富民」と認定されており、専ら祭祀、婚姻の費用に充当する土地だけで一六頃を越えている点からすれば、鄭氏が大地主所有者に属することは疑いない。この租佃経営が合爨の重要な経済基盤となっていたと考えられる。また、鄭氏が所有する全ての資産の文券には、「義門公堂産業子孫永守」等の字が印押され、家長がこの文券を家衆とともに封蔵し、あえて資産の処分を主張する者があれば不孝をもって論ずとされている(第一六則)。これは、明らかに土地等の資産が鄭氏の共有財であることを示すものである。

〈支出入〉 資産が共有であるばかりでなく、これをもとに行われる支出入もまた、家長の指揮のもとで、共同に管

理される。子弟が分担した諸々の職務のうち、新管と呼ばれる職は「錢粟の類を收放す」といい、佃租等の収入と支出に責任をもち、また同じく旧管は「冠昏喪祭及び飲食の類」に関する支出入を担当業務とする（第三六則）。その他、出納の管理、税糧の納入などについても、別に職が置かれていた（第三〇則、第三一則）。

また、家衆の日常生活に対しては、厳しい規制が加えられている。合爨の基礎単位である各房（夫婦とその子女を中心とする家族）が日常生活を送るうえで必要な物品は、それぞれにまかなうのではなく、家長が指揮するところの公堂（管理集団）がまとめて購入し、各房に支給した。³²例えば、差服長は家衆の衣食を支給することになっており、また、日常の食事も掌膳によって手配された（第五〇則、第五六則）。家衆個々の独自の衣食は許されない。

更に、「子孫^も倘し私かに田業を置き、私かに貨泉を積み、事迹顯然として彰著なる有れば、衆、之を家長に言うを得」とあって、家衆による個別的所有、経済活動も、一切厳禁された。このことが発覚すれば、獲得した財は公堂に納めなければならない（第一七則）。

△教化▽ さて、家長の統率のもとで、家衆が共同の会計を営むことは、合爨の基礎条件であるが、家衆の共同生活を長期にわたって維持するには、そのみでなく、家衆相互間の精神的結束が必要とされる。鄭氏が講じた方法は次のようなものである。第一に、その最も重要な要素は、他の諸形態と同じく、祖先祭祀であり、四時の祖先祭祀、始遷祖の祭りと族譜の確認（「明譜」）などが行われる（第一・三・八・九則）。これらを通じて、合爨の構成員がともに共同祖先から分派した血統に属することを認識するのであり、構成員相互の連帯の軸となる。

第二に注目されるのは、家族倫理、行動規範の徹底である。毎月朔望、家長は、家衆を率いて祠堂に拝謁し、親に対する子の「孝」、夫に対する妻の「敬」、兄弟の間の「愛」と「恭」などの家族倫理を確認し（第二一則）、また、毎日、家長を中心として、家衆は有序堂に集まり、「積善」（「孝弟」、「仁恕」など）を勧め、「積悪」（「恃己勢以自強、

剋人財以自富」を退けることなどを誓う（第二二則）。また、賭博や無頼のことを行えば、家衆の前で処罰が加えられ、それでも改めなければ、官に陳告して追放処分とし、「宗図」からも削除される（第一八則）。更に鄭氏では、家衆の日常の行動を監督する職（監視という）を設けて、家衆の善悪を公にし、また、毎月、勸懲簿に家衆の功過を記録させた。家衆の日常生活を監視の管理下に置こうとするものだといえる（第二五則、第二七則、第二八則）。

結局、家衆に求められるのは、徹底的な自己抑制であり、合囊の共同生活を逸脱する行為は悪とみなされて、糾弾の対象となる。祖先祭祀を通じて、血族としての一体感を培うとともに、それぞれの自己抑制と共同の規範への従属を義務付けることによって、構成員の結集力を維持したと考えられる。

△教育△ 以上は、合囊という宗族の形態を維持するための経済的・精神的な側面における機能であるが、鄭氏の合囊の今一つの際だった特徴は、教育の重視である。鄭氏では、子弟は五才にして礼を学ぶことから始め（第一一七則）、ついで、八歳で小学に入り、十二歳で外傳につき、十六歳になると大学過程に進み、学問に通じた師を招聘するという（第一一八則）。これは、おおむね元朝の時代の儒学教育の一般的なあり方に合致するものである。⁽⁵³⁾ ちなみに、鄭氏に招聘された師には金華学派に属す呉萊がおり、また宋濂はその後を受けて鄭氏に学問を授けている。⁽⁵⁴⁾

鄭氏が教育を重んじた理由の一つは、合囊の共同生活を支える人材として子弟を育てることにあつたであろうが、そのみではない。第八六則によれば、出仕の能力のある子孫が勉学に励むことは大いに推奨されたところであり、国家に忠誠を尽くして政務につとめ、身分を頼んで驕ることのないように戒めている。⁽⁵⁵⁾ これに続く第八七、八八則では、更に、下民の撫恤、臆墨の禁止など、官僚としての心得をいう。鄭氏の儒学教育は明らかに子弟の任官を視野に収めたものと考えて差し支えないであろう。すなわち、小学・大学での教育あるいは家庭教育により、高度な儒教知識を家衆の子弟に身につけさせて、官僚となるにふさわしい読書人とすることが目指されていたと考えられる。いわ

ば合爨という形態の家そのものが、読書人を養成する機能を備えているのである。⁽⁵⁶⁾ 前述したように、鄭氏は、元末から明初にかけて多数の任官者を出しているが、これが可能となったのは、鄭氏が合爨の共同生活のなかで子弟の教育をとくに重視し、この機能を充実させていたからであろう。

『鄭氏規範』は、この他、合爨を構成する家衆以外の族人を「宗人」と呼び、そのうちの貧者の救済（糧食、住居の提供）、その子弟の教育、義冢（墓）、義祠の設置などを規定している（第八九則—九六則）。

なお、先にも述べたように、合爨は古くから存在した宗族の形態であるが、そうであるからと言って、合爨に超時代的な性格を付与するのは、おそらく正しくはない。宋代以降の時代に合爨が試みられる場合、それは、前代とは異なるところの、それぞれの時代の要請に即応した新たな意義をもって登場した、という観点から理解すべきであると考えられる。ただし、この問題は、宋代以降における宗族全体の歴史的特質を見極めたうえで、改めて論じられる必要があるので、ここでは、これ以上立ち入ることはしない。

ところで、これまでに紹介してきた宗族形成の事例のうち、義荘と合爨は、族譜編纂・祠堂設立の事業に比べて、その事例数が少ないが、おそらくそれは偶然ではないと思われる。族譜編纂・祠堂設立、義荘、合爨いずれの事業を挙行するにしても、かなりの儒教知識、労力、資本を必要とするが、とりわけ義荘・合爨は、経済基盤、組織などの内容が充実しているだけに、実現するのに相当の困難が伴う。例えば、宋濂は、龍泉湯氏の義荘設置（No 36）について次のように述べる。すなわち、范仲淹等とともに、かねてより義田を設けようと考えていたが、任官して「禄賜豊厚」となり、ようやく「方に其の願う所を遂ぐる能う」、あるいは、義田数百畝を設けた簒判の劉暉なる者の場合も、もとは「家に余貲無く」、任官して初めて義田を設置できた、ところが、湯氏は「布衣の家にして初め禄賜の入無き」

をもって挙行しており、これは「義事」の点で范仲淹等に拮抗するといえ、最も困難なことであるという（『宋学士文集』卷三七、「題湯処士墓銘後」）。要するに、義荘の設置には多額の資金が必要とされるのである。しかも、義荘の維持そのものが容易なことではなかった。范氏義荘の場合、その設立以来しばしば解体の危機に陥っているが、その原因の一つは族人自身にある。族人がともすれば義田収入を自己のものとして侵奪し、あるいは規矩に違反して義田を租佃し、私有化する弊害などが指摘される。范氏義荘ではこうした不肖の族人を取り締まるために、官の監督を要請しなければならなかった。⁽⁵⁷⁾ 折角族人を集合しても、当の族人が宗族維持の精神をもっていなければ、ともすれば自己の利益の追求に走り、結果として義荘を困難な状況に追い込むことになるのである。同じ様な問題が、南宋から元朝にかけて存続した明州（寧波府）の昼錦義荘でも存在したことは福田立子氏によって検討されている。⁽⁵⁸⁾ また、遠藤隆俊氏は、「富家臣室」によって設立された義荘で永続するものが少ないことを示す史料を紹介しており、⁽⁵⁹⁾ 現実にも、范氏義荘のように長期にわたって義荘の体制を維持することが難しかったことが窺われる。

合爨は、族人（家衆）全てが同居共財の生活を送り、彼らに対して厳しい儒教的倫理、行動規範の習得が義務付けられる点からすれば、その結合力は、義荘に比べれてはるかに強いと思われるが、それだけに、その開始も維持も容易ではない。例えば、宋濂はかつて、方孝孺に対して、元末明初の地主・士大夫が模範とした浦江鄭氏の合爨を、「数百年、士大夫の家も未だ行なう能わざる所の者」と述べた⁽⁶⁰⁾ という。また、浦江深溪の王子覚の試み（No 3）についても、宰相すら「尚お族を合して以て居する能わざるに、子覚は一章布の士にして乃ち断然と之を行なう。斯れ之を賢と謂うべきなり」といい、宋濂はその困難さを指摘している。⁽⁶¹⁾ これまでに見てきたように、中国における「家」の基本は、家産均分の慣行を通じて析出され、独自の会計を営む個別家族であり、しかも、元末明初期においては、宋濂、方孝孺ともに嘆いたように、地主・士大夫（乃至その家族）が私的利益を追求し、親族・宗族に関心を寄せない風潮

が蔓延していた。そうしたなかで、家産均分を禁じて合爨を開始するには、義荘と同じく強力な経済基盤が必要となるだけでなく、合爨に対する兄弟乃至近親者の理解と協力が不可欠であり、また、合爨実現後も、共同生活の維持のためには、独自の会計の営み、自由な言動が許されないことを構成員に徹底させなければならない。構成員にかかる精神的負担は、合爨において最も顕著であるといつてよい。このように義荘、合爨ともに、その挙行・維持は決して容易なものではなく、おそらく、元末明初の地主・士大夫の多くも、そうした困難を予想して、比較的挙行しやすい族譜編纂、祠堂設立から宗族形成の試みを始めたと考えられる。

△おわりに▽

本稿の目的は、△はじめに▽で述べたように、洪武年間において継続的に断行された弾圧の過程で解体した、と方孝孺が伝える「鉅室故家」、「大家富民」の宗族が当時いかなる内容をもっていたのかを探ることにあつた。その検討結果を整理しておきたい。

一 宗族を形成しようとする動きはつとに宋代から始まっているが、元末明初の時代に至るまでの間に、浙東・浙西の地域に広汎に普及していたとは必ずしも言えない。宋濂、方孝孺は、元末明初の時代、人々が私的利益の追求に奔走し、宗族形成の事業に対して無関心であることを嘆いており、この観察に依拠するならば、この時代における宗族の普遍的存在を思い描くことは難しい。しかし、その一方で、彼らは宗族形成につながる多数の事業が彼らの時代に挙行されたことを伝えている。宗族形成の中心は元末の地方下級官吏、儒学教官、建国以前の朱元璋政權及び明初（洪武年間）の文官、武官、処士と呼ばれる一般の読書人などであり、当時における任官の途の開放の形勢に乗じて官界に進出していった地主・士大夫層に属すると考えられる。

二 宗族形成の事業は三つに大別される。その一つは、族譜編纂・祠堂設立であり、この形態の特徴は、共同祖先から、家産均分の慣行を通じて析出され、分派した族人（乃至その家族）を、基本的には祖先祭祀の挙行、族譜の編纂を媒介として結集しようとする点にある。そのなかには、族人の救済、教育の機能を充実させている事例もある。

三 第二の形態は義荘であり、家産均分の対象とされない義田等の宗族共有財を永代的な経済的基盤として、祖先祭祀、族人の日常生活の保証、教育などの事業を行うことを特徴とする。その典型は北宋以来の長期存続を誇る范氏のそれであり、宋代のみならず、科挙による中央官界への道が閉ざされた元朝においても、下級官吏、儒学教官を送りだして、地方官僚機構との関係を維持した。元末明初期、范氏義荘との関係は不鮮明であるが、義田の設置と族人の救済、教育など、おおむね范氏のそれに共通する機能をもった義荘が、地主・士大夫により樹立されている。

四 第三の形態は、合爨である。その形成のあり方は、前二者のように、共同祖先から分派した族人を集合するのではなく、兄弟等近親者の間で家産均分の禁止を合意することから開始される。合爨が多数の族人を抱えるようになるのは、世代を重ねる過程においてであり、次第に増加する家衆を共同生活のなかに包摂していく。その構造は、当時地主・士大夫が合爨を試みるに際して模倣した鄭氏のそれに如実に示される。すなわち、家長・宗子以下の管理集団のもとで、全ての会計（資産、支出入）は共同に管理され、個人の会計の営みは一切許されないこと、また、祖先祭祀の儀礼の挙行を通じて、家衆の一体感を高め、かつ様々な儒教倫理の徹底により、精神面での共同性をも保つことである。合爨のいま一つの特徴は、共同生活の維持を目的とした右の諸機能のみでなく、教育の機能も重視されたことであり、任官を視野に収め、家庭教育、小学・大学の教育過程を通じて、高度な儒教知識を習得させている。

以上の検討を通じて、親族・宗族への関心が薄いとされた元末明初の同時代において、様々な形態をとる宗族形成の試みが挙行されたことが確認される。それらの事業はともに、相当の資本、労力、儒教知識を必要とするものであ

り、当時、富家・富民等と呼ばれた地主・士大夫にとっても容易に挙行できたわけではなく、とりわけ義荘、合爨は宗族としての体制が充実している反面、それを挙行・維持するうえでの困難も大きいと考えられた。そうした困難が予想されるにもかかわらず、元末明初期、地主・士大夫が多数の関連の事業を挙行していったところに、この時代における宗族形成の風潮の高揚を読み取ることができるであろう。

こうした検討結果を踏まえるならば、洪武年間に解体を遂げた宗族のなかには、范氏義荘のように、比較的長期にわたって宗族組織を維持してきた事例も含まれるであろうが、それとともに、元末明初期における宗族形成の高揚の風潮のなかで新たに成立した宗族が相当部分含まれたと見るべきである。

では、元末から明初にかけての時代において、地主・士大夫が新たに宗族形成を志向したのはなぜであるのか。すでに筆者は宋代以降における宗族形成の契機と宗族の歴史的特質について、おおまかな仮説と若干の実証作業を行なっているが、次稿では、それらを立脚点としつつ、元末明初という時代に即した問題の検討を行ないたい。

〔付記〕

筆者は、一九九一年八月、復旦大学の主宰により、上海市、餘姚市、及び松江市で開催された第四回国際明史学術討論会において、「元末明初的宗族の実像」と題する発表を行ったが、本稿は、その際に提出した中文の原稿の一部を手直したものである。

〔註〕

- (1) 宋代以降における中国社会の支配階層を地主層に求める見解は戦後の研究のなかで通説となっているが、最近、彼らがそれのみでなく士大夫という側面をもち、そのことが、中国固有の支配―被支配関係を探るうえで重要な鍵となることを提唱したのは、森正夫氏である。森氏の見解は、「宋代以降の士大夫と地域社会―問題点の模索―」（昭和五七年度科学研究費補

助金総合研究(A) 研究成果報告書『中国士大夫階級と地域社会との関係についての総合的研究』、一九八三年)にまとめられている。

- (2) 愛宕松男「元の中国支配と漢民族社会」(岩波講座『世界歴史』九、一九七九年)。科挙の復活については、この他、田中萃一郎「元の官吏登庸法に就いて」(『史学雑誌』二七・三、一九一五年)、宮崎市定「元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢関係―科挙復興の意義の再検討―」(『東洋史研究』二二・四、一九六五年)などの研究がある。また、寺田隆信「近世士人の読書について」(平成元年度・平成二年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書『中国社会における士人庶民関係の総合的研究』、一九九一年)は、元朝治下における科挙受験のために行われた教育過程に言及している。
- (3) 大島立子「元代の儒戸について」(『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻、一九八一年)。植松正「元代江南の地方官任用について」(『法制史研究』三八、一九八八年)。太田彌一郎「元代における儒戸の地位」(前掲『中国社会における士人庶民関係の総合的研究』)。
- (4) 元朝治下の江南の地主・士大夫の動向については、愛宕松男、大島立子、植松正諸氏の前掲論考の他、以下の諸研究が参考になる。牧野修二「元代廟学書院の規模について」(『愛媛大学法文学部論集・文学科篇』一二、一九七九年)、同「元代の儒学教育―教育課程を中心にして―」(『東洋史研究』三七・四、一九七九年)、同「元代勾当官の研究」(『大明堂』、一九七九年)、片山共夫「元代の士人について」(『一九八三・中国史シンポジウム・元明清期における国家「支配」と民衆像の再構成―支配の中国的特質―』、九州大学文学部東洋史学研究室編、一九八四年)。森田憲司「元代漢人知識人研究の課題二、三」(『中国―社会と文化』五、一九九〇年)は元代知識人に関する研究状況と問題点を手際よく整理している。
- (5) 檀上寛「明王朝成立の軌跡―洪武朝の疑獄事件と京師問題をめぐって―」(『東洋史研究』三七・三、一九七八年)、同「元・明交替の理念と現実―義門鄭氏を手掛かりとして―」(『史林』六五・二、一九八二年)、同「義門鄭氏と元末の社会」(『東洋学報』六三・三・四、一九八二年)、同「明代科挙改革の政治的背景―南北卷の創設をめぐる―」(『東方学報』五八、一九八六年)など。
- (6) 檀上寛前掲「明代科挙改革の政治的背景―南北卷の創設をめぐる―」。また、生駒晶「明初科挙合格者の出身に関する一考察」(『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』上巻、汲古書院、一九九〇年)。
- (7) 檀上寛前掲「明王朝成立の軌跡―洪武朝の疑獄事件と京師問題をめぐって―」、同「明初「空印の案」小考」(『堺女子短期大学紀要』二〇、一九八五年)など。森正夫氏の研究成果は『明代江南土地制度の研究』(同朋舎出版、一九八八年)に集約されている。
- (8) 檀上寛前掲「明代科挙改革の政治的背景―南北卷の創設をめぐる―」。

- (9) 方孝孺の経歴については以下の諸史料を参考にした。『明史』巻四一、「方孝孺」伝、黄宗羲『明儒学案』巻四三、諸儒学案、「文正方正学先生孝孺」、「方正学先生年譜」(張紹謙鑑定・盧演・翁明英輯纂)。なお、檀上寛氏は、方孝孺の政治思想を考察する作業を進めている。檀上「方孝孺の政治思想―明初の理想的君主観―」(『堺女子短期大学紀要』一九、一九八四年)、同「方孝孺の理想的国家観―前近代中国の連帯の位相―」(『富山大学人文学部紀要』一五、一九八九年)。
- (10) 檀上寛前掲「明王朝成立の軌跡―洪武朝の疑獄事件と京師問題をめぐって―」。森正夫前掲著書。
- (11) この間の経緯については、森前掲著書に詳しい。
- (12) 「宗」の概念については、滋賀秀三「中国家族法の原理」(創文社、一九六七年)に詳しい解説がある。
- (13) 森正夫前掲著書。
- (14) 清水盛光「中国族産制度攷」(岩波書店、一九四九年)、近藤秀樹「范氏義荘の変遷」(『東洋史研究』二一―四、一九六三年)。
- (15) 日本の中国史学界(とくに明清時代史研究を念頭に置いている)においては、血縁関係を紐帯とする宗族が古代以来長期にわたって中国社会の構造を規定してきたという通念が存在する。そうした通念については、拙稿「宋代以降における宗族の特質の再検討―仁井田陞の同族『共同体』論をめぐって―」(『名古屋大学東洋史研究報告』一二、一九八七年)のなかで紹介したことがある。個別研究を挙げることはしないが、一九八五年度に発表された明清関係の研究の動向を紹介する「明清」(『史学雑誌』九五―五、八一―九八五年の歴史学界―回顧と展望―)、一九八六年の冒頭の文章には、そうした通念の反映が見られる。こうした通念に基づけば、前近代の中国社会では、宗族がいつの時代にも普遍的に存在するか、あるいはそれが社会構造のあり方を規定するがゆえに、絶えず自然発生的に成立することになる。本文での言及はかかる通念を意識したものである。
- (16) これまでに筆者が進めてきた作業をもとに、宗族形成の概念を示した。その際、滋賀秀三前掲「中国家族法の原理」に助けられるところが大きい。本文中で紹介した同居共財に関する滋賀氏の見解も、同書で述べられている。筆者の従前の研究としては、前掲「宋代以降における宗族の特質の再検討―仁井田陞の同族『共同体』論をめぐって―」、「宗族の形成とその構造―明清時代の珠江デルタを対象として―」(『史林』七二―五、一九八九年)がある。なお、一九八九年一月、南京で举行された国際清史討論会において、後者の論文に基づく発表を行ったが、その発表の要旨は、西南民族学院歴史系教授の劉徳仁氏の御厚意により、「宗族の形成和構造」と題して、『西南民族学院学报』(哲学社会科学版)一一―三(一九九〇年)に掲載された。この場を借りて、同氏に謝意を表しておきたい。
- (17) 宋代以降における宗族形成の動向は、前掲「宋代以降における宗族の特質の再検討―仁井田陞の同族『共同体』論をめぐ

つて」で整理したことがある。

- (18) 小林義廣「宋代における宗族と郷村社会の秩序―累世同居を手がかりに―」（『東海大学紀要文学部』五二、一九九〇年）。この他、合纂に言及した論考には以下のものがある。牧野巽「司馬氏書儀の大家族主義と文公家礼の宗法主義」（『近世中国宗族研究』（日光書院、一九四九年。同書は一九八〇年、お茶の水書房から『牧野巽著作集』第三巻として再刊されている）、清水盛光「支那家族の構造」（岩波書店、一九四二年）、仁井田陞「支那身分法史」（『東方文化学院』一九四二年。同書は一九八三年、東京大学出版会から、『中国身分法史』と改題のうえ再刊されている）。

- (19) 檀上前掲「元・明交替の理念と現実―義門鄭氏を手掛かりとして―」。

- (20) 宋濂の略歴は、『明史』巻二二八、「宋濂」伝、及び鄭楷「翰林学士承旨嘉議大夫知制誥兼修国史兼贊善大夫致仕潛溪先生宋公行状」（四部備要本『宋文憲公全集』巻首に収録）を参考にした。

- (21) 濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』（東京大学出版会、一九八二年）第一部第一章「明代前半の水利慣行」。

- (22) 方孝孺、宋濂、貝瓊の三人の文集とともに四部叢刊本を用いる。なお、宋濂『宋学士文集』については、『宋文憲公全集』（四部備要本）を参考にして、前者の刊本の誤りを訂正した。

- (23) 『明史』巻一三七、「貝瓊」伝、及び前掲『清江貝先生集』の巻首。

- (24) 最近の研究は、浙東と浙西が、農業技術、農業経営のあり方の歴史的沿革において大きく異なり、浙東の河谷平野・支谷・扇状地においてより先進的であることを明らかにしている。宗族形成の事例が浙東に集中しているという収集の結果が、単に宋濂等の交友関係の問題のみでなく、その基底において、こうした浙東・浙西の経済条件の相違、あるいは浙東が朱子学の正統を誇る金華学派の主要活動舞台であって、儒学が盛んであること、これらの問題に関わりがある余地を残すが、ここでは、そうした問題にまでは立ち入れない。なお、浙東・浙西の状況については、拙稿「明朝の『里』制について―森正夫著『明代江南土地制度の研究』に寄せて―」（『名古屋大学東洋史研究報告』一五、一九九〇年）で整理したことがあるので、参照していただきたい。

- (25) 以下、宗族関連事業を挙行した人物を中心として、任官者の名前と官職を列挙する。史料来源は図表に同じ。ただし、おもに宋濂等の記録に依拠したので、列挙した他にも任官者が存在する可能性を残す。

①No.2の方氏：方孝孺（明の漢中教授、翰林侍講等）、その父の克勤（明の濟寧府知府）、祖父の炯（元の郵泉教諭）。No.5の呉氏：世昌（元の寧海校官等、明の処州府儒学教授）、その子の公願（明の工部主事等）、世昌の弟の世徳（元の寧海校官等、衢州の美化書院山長）、その子の公達（明の進士及第、広平知府）。No.8の呂氏：汲の父の鑰（元の永康尹）、汲の孫の文燧（朱元璋政權下で嘉興知府）。No.13の林氏：陞（明の刑部主事）、その父の淳（元の陽江県尹）。No.18の祝氏：大明（元の処州路総

管府経歴等)、その長子の嵩(元の処州路松陽主簿)、次子の岑(明初に萊州通判)、大明の孫のうち、鉄(明の黄陂県主簿)、鐘(明の泗州判官)。No 25の張氏:宣(明の翰林国史院編修官等)、その父の端(元の江浙行枢密院都事)、端の父の明德(元の陰陽学正)。No 30の陳氏:敬(明の福建行省員外郎)、升(金華県学教諭)、その父の克和(元の市舶都目)。No 46の鄭氏:綺の子孫のうち、文嗣、文融の系統から、元末明初期、任官者が多数出現。例えば、泳(元の温州路総管府経歴、従子の深とともに、宰相脱脫の家で講授)、浹(元の江浙行省宣使、湜(明初の福建布政司左参議)、濟(明の春坊左庶子)、沂(明の礼部尚書)など。

② No 17の柳氏:穆の父の貞(元の紹興路学正)、貞の父の貫(元の翰林侍制)。No 27の張氏:天錫の祖父の夢龍(元の湖州儒学学正)。No 28の張氏:応和の従兄弟のうち、応辰(元の玉山教諭)、応麒(元の金壇稅務副使)など。No 36の湯氏:濱の子の楷(元の龍泉県学教諭)。No 44の蔣氏:玄の父の吉相(元の時、東宮で仁宗に仕え、典用監知事、後に襄陽路穀城県尉)。
③ No 9の宋氏:濂(明の礼部主事等)、その兄の淵(明の義烏医学教諭、濂の嫡孫の慎(明の殿廷儀礼司序班)、濂の次子の璩(明の中書舍人)。No 23の桂氏:仲權(明の忠州鄆都県知県)、の従兄弟の德称(明初、太子正字、更に晋王の傳に)、德称の子の慎(明の中書舍人)。なお、上掲諸例のうち、No 2の方氏、No 9の宋氏については、別表に掲げた出典の他、前掲『方正学先生年譜』、『明史』巻一二八、「宋濂」伝によつて補っている。

(26) 程頤の大宗主義については、清水盛光前掲『支那家族の構造』に詳しい。

(27) 方孝孺『遜志齋集』巻一、「宗儀」、『重譜』。『宋学士文集』巻七四、「題寿昌胡氏譜後」。

(28) 小宗主義については、大宗主義と同じく、清水盛光前掲『支那家族の構造』が詳細な検討を行っている。

(29) 祠堂、族譜に「収族」の機能があることは、つとに清水盛光前掲『支那家族の構造』で指摘されている。

(30) 周藤『宋代の佃戸制』(『歴史学研究』一四三、一九四八年)、濱島前掲『明代江南農村社会の研究』第一部第一章。

(31) 朱子『家礼』については、上山春平『朱子の「家礼」と「儀礼経伝通解」』(『東方学報』京都、第五四冊、一九八二年)が詳しく考察を行っている。また、牧野巽前掲『司馬氏書儀の大家族主義と文公家礼の宗法主義』は、朱子『家礼』と宗族との関係を論じていて有用である。

(32) 前掲『宋代以降における宗族の特質の再検討—仁井田陞の同族「共同体」論をめぐる—』。拙稿発表後、遠藤隆俊氏が、「范氏義荘の諸位・掌管人・文正位について—宋代における宗族結合の特質—」(『集刊東洋学』五九、一九八八年)及び「宋末元初の范氏について—江南士人層の一類型—」(『歴史』七四、一九九〇年)の二篇の論考を提出しており、義荘の内容と変遷を詳しく論じている。

(33) 宋末以降、元末明初期までの范氏義荘の動向に関連する研究には、清水盛光前掲『中国族産制度攷』、近藤秀樹前掲『范氏

義荘の変遷」、遠藤隆俊前掲「宋末元初の范氏について—江南士人層の一類型—」がある。

- (34) 范氏の族人で「登進志」に掲載されたもののなかには、恩蔭による者が多数含まれている。梅原郁『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五年）によれば、宋代はとりわけ官職についた父祖のおかげを被つて子孫や親族が官位職階を与えられる恩蔭の制度が整備された時代であり、恩蔭出身者は確かに進士出身者に比べて下風に立たされたが、高官にのぼることも稀ではなかった。高級官僚や外戚にとつて、特権と勢力を維持し、次の世代に譲り渡してゆく重要な柱の役割を果たした。また下級官僚にとつても同様の意味をもつたという。范氏においても、恩蔭が科挙及第とならんで官僚制度との関係を保つ有力な手段となっていたと考えられる。

- (35) 遠藤隆俊前掲「宋末元初の范氏について—江南士人層の一類型—」でも、このことが注目されている。

- (36) 清水盛光前掲「中国族産制度放」。

- (37) 湯鑑の義田設置については、黄潛『金華黄先生文集』巻一〇、「湯氏義田記」でも伝えられている。

- (38) 『宋學士文集』巻二七、「元故婺州路儒学教授季公墓銘」。

- (39) 『麟溪集』は、鄭氏の台譽を賞賛した文人の文章を集めて刊行した書物である。『遜志齋集』巻一三、「王氏深溪集序」に、「其初鄉人称之、浙水之東又称之、既天下之名賢鉅儒遂発於文辞、以咏歌之。鄭氏嘗集為書、即所居之地、名曰麟溪集、以伝」とある。

- (40) 檀上前掲「元・明交替の理念と現実—義門鄭氏を手掛かりとして—」、同「義門鄭氏と元末の社会」。なお、任官者の具体例は、前註(25)参照。

- (41) 『遜志齋集』巻一三、「鄭生允充字序」。

- (42) 前註(39)引用の資料参照。

- (43) 『遜志齋集』巻一三、「與童伯礼」。

- (44) 前註(30)参照。

- (45) 『明史』巻二九六、「鄭濂」伝に付された王澄の伝記。

- (46) 『鄭氏規範』が元末明初期に成立したことは、すでに細野浩一、檀上寛両氏によつて検証されている。細野「明末清初江南における地主奴僕関係」（『東洋学報』五〇—三、一九六七年）、檀上前掲「鄭氏規範の世界」。

- (47) 檀上前掲「鄭氏規範の世界」。

- (48) 「宗子上奉祖考、下壹宗族」（第七則）、「家長総治一家大小之務、凡事令子弟分掌」（第一三則）という。

- (49) 例えば、「卑幼不得抵抗尊長／一日之長皆是」（第一〇六）、「子孫受長上訶責、不論是非、但當俯首默受、毋得分理」（第

- 一〇七則)、「子孫固当竭力、以奉尊長、為尊長者亦不可挾此」(第一〇八則)とある。
- (50) 檀上前掲「鄭氏規範」の世界」。
- (51) 『明太祖実録』洪武三年二月庚午及び同三〇年四月癸巳の各条。
- (52) 「各房用度雜物、公堂総買而均給之」(第一四〇則)という。公堂という言葉は、他にも出てくるが、例えば、「委人啓肆、皆公堂給本與之」(第六〇則)などと使われており、家長以下の管理集団を指していると思われる。
- (53) 牧野修二前掲「元代の儒学教育―教育課程を中心にして―」、同「元代生員の学校生活」(『愛媛大学法文学部論集・文学科編』一三、一九八〇年)。
- (54) 『宋学士文集』卷六一、「鄭景彝伝」、同書卷五一、「羅山遷居志」。
- (55) 一 子孫器識可以出仕者、頗資勉之、既仕、須奉公勤政、母蹈貪黷以忝家法。任滿交代、不可過於留戀、亦不宜恃貴自尊以驕。宗族仍用一遵家範。違者以不孝論。(第八六則)
- (56) 宋代における累世同居(台鑾)を検討した小林義廣前掲「宋代における宗族と鄉村社会の秩序―累世同居を手がかりに―」によれば、宋代のそれにも、同じく、読書人を再生産する機能が具備されていたという。
- (57) 近藤秀樹前掲「范氏義荘の変遷」。
- (58) 福田立子「宋代義荘小考―明州樓氏を中心として―」(『史艸』一三、一九七二年)。
- (59) 遠藤隆俊前掲「宋末元初の范氏について―江南士人層の一類型―」。
- (60) 『遜志齋集』卷一一、「與童伯礼」。
- (61) 『宋学士文集』卷四六、「浦陽深溪王氏義門碑銘」。
- (62) 前註(16)で提示した二論考参照。

「宗族形成事例表」

- * この表を作成するに際して用いた史料は、宋濂『宋学士文集』、方孝孺『遜志齋集』、貝瓊『清江貝先生文集』である。「史料来源」では、表題の下の（ ）内に、それぞれの書を宋・方・貝と略記し、その後に巻数を付した。
- * 配列は字画順（字体は常用漢字）。
- * 宗族結合の事例を収集するに際しては、族譜編修・祠堂設立、義荘、合爨などの事業を行なったかどうかを基準としている。
- * 「地域」…宗族関連の事業を行なった各姓の居住地。地名は明代の行政区画に従う。（ ）内は省区分。
- * 「設立年代」…明確な年代を特定できない場合、例えば、「元末明初」、「明初」というように表記した。「明初」はほぼ洪武年間、ただし、事例を伝える宋濂、貝瓊はそれぞれ洪武一四年、同一二年に死去しているので、その場合、「明初」は、建国後の時点までを指す。
- * 合爨と義荘の事例には、通し番号の左側にそれぞれ△、○の記号を付した。
- * 諸例のうち、No 34とNo 35の黄氏の合爨、No 37とNo 38の童氏の合爨は、それぞれ同一の事業である可能性を残し、またNo 40とNo 41の楼氏の族譜編纂も相互に関係があるかもしれないが、確認できなかった。

姓	地域	成立時期	事業主体	内 容	史料来源
1 丁	台州府寧海 県（浙江）	明初	「丁先生」（方孝孺の同郷人）	宗図編纂。	「丁氏復姓序」（方・一三）
2 方	台州府寧海 県侯城里 （浙江）	明初（洪武一 〇年前後）	孝孺（洪武朝で漢中教授、また蜀献王の世子の師、建文朝で翰林侍講）及び文大	族譜編纂、祖祠設立	「方氏族譜序」（宋・四二） 「建祖祠移族人疏」（方・八） 「族譜序」（方・一三）
△ 3 王	金華府浦江 県深溪（浙江）	元末明初	澄とその子の子 覚・子麟、子覚 の子の応（明の 洪武年間に参	合爨を挙行。	「浦陽深溪王氏義門碑銘」（宋・四六） 「元故王府君墓志銘」（宋・六九） 「王氏深溪集後」（方・一三） 「義門詩序」（方・一三）

△ 9	○ 8	7	△ 6	△ 5	4
宋	呂	吳	吳	吳	任
金華府浦江 県 金華府金華 県潜溪(浙 江)	金華府永康 県太平里 (浙江)	金華府 (浙江)	紹興府諸暨 県(浙江)	処州府 (浙江)	寧波府奉化 県崎山(浙 江)
② 明初	①② 元末	明初	元末	① 元末 ② 明初	元末
濂(明の礼部主 事、侍講学士な ど) 宋濂の本族とく に濂の兄の淵 (明の義烏医学	汲 汲の孫の文燧 (朱元璋政権下 で、嘉興知府な ど)	彦誠(宋濂の弟 子)	長卿(明の洪武 二年歿)	世昌(元の寧海 校官で、明初に 処州府儒学教 授)の妻の丘氏 世昌とその子の 公願(明の洪武 四年、辟举に応 じ、後に翰林院 編修、工部主事)	相(元の両浙都 輦運塩使司照 磨)
至正年間、原籍地の金華県か ら浦江県、青蘿山に移住、以 後、子孫の「析爨」を禁止。 世譜編纂。為善堂を建設し、 「先徳」を明らかにした。	義田と義学設置。 義田・義学を整備。	合爨を举行、少なくとも十数 年間維持。 宗譜を編纂。	祠堂を建設、また族譜編纂。	敬思堂を建設、祭田七十畝余 りを設けて、「歳時の祭り」に 給す。	議・念等。
「宋氏世譜序」(方・一三) 「宋氏為善堂記」(方・一五)	「蘿山遷居志」(宋・五一)	「故嘉興知府呂府君墓碑」(宋・六二)	「故筠西呉府君墓碑」(宋・四四)	「呉氏宗譜序」(方・一三)	「元故両浙都輦運塩使司照磨任公墓誌 銘」(頁・八)
				「処州教授呉君妻丘氏孟貞墓銘」(宋・ 一七)、「括蒼呉氏世系碑銘」(宋・三八)	

17	16	15	14	13	12	11	10	
柳	俞	季	林	林	林	貝	汪	
金華府浦江 県（浙江）	金華府 （浙江）	処州府龍泉 県（浙江）	台州府天台 県梅溪（浙 江）	温州府平陽 県蓋竹（浙 江）	温州府平陽 県嶺門（浙 江）	嘉興府崇德 県（浙江）	嚴州府 （浙江）	
明初	元末明初	元末明初	元朝	明初		明初	明初	
穆	恂（宋濂の弟子） とその父	汶（元の義兵萬 戸、朱元璋政權 下で処州翼同知 元帥）。	六一学正なる者	陞（明の刑部主 事）	與直（洪武八年、 国子生、後に上 舎に任じられ る）	瓊（明の国子助 教）	中（明の国子助 教）	教諭
依頼。「譜図」の編纂、宋濂に序を	恂の父、「尤好学、譜其同姓之 親、以聯其族」という。恂は 父の事業を継承、宗譜を完成。	族人の教育と救済（族人貧者 買田以贍之、不能学者延師以 教之）。	追遠堂の建設、祭田の設置、 四百畝の土地の収益をもとに、 疾により婚嫁できない族中の 女性を援助。	祠堂・斎・学の設立、定期的 な祖先祭祀の舉行。	祖父の文卿を葬った際、墓の 傍に来徳堂を築く。「歳時既祭 而燕、合族人於此焉」という。	族譜編纂。	家譜編纂。（但し、それ以前か ら存在していた可能性もあ る）	
「柳氏宗譜序」（宋・六六） 「柳氏譜記」（方・一七）	「俞氏宗譜序」（宋・六九）	「故処州翼同知元帥季君墓銘」（宋・七 二）	「追遠堂記」（貝・一六）	「平陽林氏祠学記」（宋・七三）	「来徳堂記」（貝・二五）	「貝氏族譜序」（貝・二八）	「嚴陵汪氏家譜序」（宋・七三）	

18	○	祝	金華府麗水 (浙江)	元末明初	大明(元の延祐初め、薦を受けて武義儒学教諭、後に処州路総管府経歴)	「他郡に散居」する族人を歴訪して調査、家牒に収録。また、義荘と学校の設立。	「元故処州路総管府経歴祝府君墓銘」(宋・五八)
19		胡	嚴州府壽昌 (浙江)	明初	栄なる者	譜を編纂。名を翰という者が京師に来て、宋濂に文章を求める。	「題壽昌胡氏譜後」(宋・七四)
20		徐	金華府 (浙江)	明初	敏(明初の生員)	もとの譜牒が戦乱により失われたため、重修を試みる。	「跋徐氏譜図後」(宋・四九)
21		徐	衢州府開化 (浙江)	明初	孫生なる者(明初、給事中に抜擢)	譜の重修。	「徐氏譜序」(方・一三)
△22		徒	応天府溧水 (南直隸)	元末乃至元末明初	処士の釜の前	「一門四世、総麻同爨」。	「故処士溧水徒君彦觚」(頁・三〇)
23		桂	寧波府慈溪 (浙江)	明初	仲権(明の忠州鄭都県知県)	家乗を編修。	「桂氏家乗序」(宋・四九)
24		馬	金華府東陽 (浙江)	明初	銓(明初、県学弟子員、国子監生)	譜図編纂。	「題馬氏譜図後」(宋・四五)
25		張	常州府江陰 (南直隸)	明初	宣(明初、元史編修、翰林国史院編修官)	元末の戦乱後、張氏の系譜を後世に伝えるため、譜図を編纂。	「張氏譜図序」(宋・六)
26		張	金華府金華 (唐山)	元末至正年間	栄	始遷祖を祭る祠堂の設立、定期的な祭祀の行事、祭田の設置。	「金華張氏先祠記」(宋・一〇)

27	張	金華府浦江 県（浙江）	元末	天錫	族人の救済、祠堂設立。	「元故一郷善士張府君墓版文」（宋・一六）
28	張	応天府句容 県戴亭 （南直隸）	元末明初	允達	応和とその孫の文原が譜図の編纂を計画、文原の従子の允達が譜図の概略を完成。	「戴亭張氏譜図記」（宋・一八）
29	張	台州府黃巖 県（浙江）	元朝及び明初	昭	遂なる者、子の光祖等に託して、樂善堂を「歲時合族之所」となし、孫の若奎等がこれを維持、元末破壊、洪武一〇年、若奎の子の昭が復興を協議、翌年完成。「会族之礼」を举行、族人の昇（明初の太学生）が宋濂に序を求める。	「敦睦堂記」（宋・七四）
30	陳	紹興府府山 （浙江）	明初	敬（明の福建行省員外郎）と升（金華県学教諭）	譜図編纂。宋濂は敬等と交流があり、記を寄せた。	「陳氏譜図記」（宋・一二）
31	陳	台州府天台 県東哲山 （浙江）	元末明初	秉彝とその祖父	秉彝の祖父、始遷祖を祭る祠堂を建設。元末の兵乱により破壊された後、秉彝が再建、祭田を付置。	「天台陳氏先祠記」（方・一六）
32	陶	台州府黃巖 県湫水。	明初	宗儒（明初に翰林院典籍、同秘書丞）。	家乘編纂。	「陶氏家乘序贊」（宋・六）
○33	黄	紹興府諸暨 県孝義（浙江）	① 宋 ② 明初	振（宋の贈衛尉少卿）の妻の劉氏 振の子孫の周氏	「斥嫁賃、以規義田、均給婦族」という。 「旧譜」を収集し、族譜を重	「諸暨孝義黄氏族譜序」（宋・四二）

43	42	41	40	39	△38	△37	○36	△35	△34	
端	葛	楼	楼	楊	童	童	湯	黄	黄	
応天府溧水 江)	台州府寧海 県泉水(浙	金華府義烏 県(浙江)	金華府義烏 県智者郷 (浙江)	紹興府の彩 煙(浙江)	金華府浦江 県(浙江)	金華府浦江 県(浙江)	処州府龍泉 県(浙江)	金華府浦江 県(浙江)	金華府浦江 県(浙江)	
明初	明初	明初	明初	明初	元末明初	明初	②① 元末 元初	明初	元末明初	
復初(元末の属		希仁	璉(宋濂の弟子、 明初、大同府宣 寧県主簿)		処士の釈卿の妻 の羅氏(童賢母) とその四子	伯礼なる者とそ の兄弟	鏞 鏞の子の京	資善なる者	逢吉	(字は思文)
元末の戦乱により、譜牒が失	族譜編纂。	その十世以下の祖を記録する 宗譜を編纂。	家乗二巻を編纂。	家乗編纂。	四子、賢母の教えに従い、「遂 相與合食、不分財異爨」とい う。また先祠(祠堂)を設立。	合爨を举行。また、祠堂設立 と族譜編纂。	義田二百畝を設置。 兄の濱と協議、父以来の義田 を増やす。義荘の施設の整備 と塾での一族の子弟の教育。	二人の弟を率いて「聚食不析 (合爨)。	黄氏は合計で十数人。逢吉が とくに尽力して合爨を举行。	修。
「溧水端氏家牒序」(宋・六)	「葛氏族譜序」(方・一三三)	「楼氏宗譜序」(方・一三三)	「義烏楼氏家乗序」(宋・四二)	「跋彩煙楊氏家乗後」(頁・二三)	「童賢母伝」(方・二二)	「與童伯礼」(方・一一) 「董氏族譜序」(方・一三三)	「故龍泉湯府尹甫墓碣銘」(宋・二二二) 「元故婺州路儒学教授季公墓銘」(宋・ 二七)、「故龍泉県学教諭湯府君墓志銘」 (宋・三六)	「余慶堂記」(方・一六)	「義門銘」(宋・六一)	

△50	羅	寧波府慈溪 県（浙江）	元朝	善卿なる者、明 遠以下の五子あ り、ともに高齢 に達し、五老人 と称される。	五老人には計二十二人の子が あり、「共纂而食者五世」とい う。元末の至正年間初め、「同 居耆徳」により旌表される。	「羅氏五老図詩卷序」（宋・六）
49	魏	紹興府上虞 県（浙江）	明初	鎮	世譜を編纂、戸部郎中の某を 通じて宋濂に序を求める。	「上虞魏氏世譜序」（宋・二二）
○△48	韓	寧波府鄞県 （浙江）	元末明初	性（元の延祐六 年—明の洪武八 年）	義荘、義塾の設立。また、合 纂を実現。	「故韓処士碣銘」（頁・三〇）
47	謝	寧波府象山 県（浙江）	明初	徳祚（明初、薦 により南陵丞）	始遷祖以下一三世の子孫を網 羅した族譜編纂。	「謝氏族譜序」（方・一三三）
△46	鄭	金華府浦江 県感徳郷 （浙江）	南宋淳熙年 間	綺	合纂を開始。元末明初の段階 ですすでに十世前後を経過。	『明史』卷二九六、「鄭濂」伝。「元封 從仕郎江浙等処行中書省左司都事鄭彦 貞甫墓誌銘」（宋・四六）。「采芾子鄭処 士墓碣」（方・二二）。「故中順大夫福建 布政司左參議鄭公墓表」（方・一二二）。 また、「鄭氏規範」（学海類編本）。
△45	蔣	金華府東陽 県（浙江）	明初	明初の宗顕の時	「疎親聚食、合為一身」とい う。	「蔣氏異瓜弁」（方・七）
44	蔣	金華府東陽 県（浙江）	元末	玄（許謙に従学。 至正六年歿）	族人を率いて始遷祖を祭祀、 族中の貧者には両月分の穀物 を支給。また、祖父の沐が創 建した義塾を補修、儒者を招 いて子姓を教育。	「東陽貞節処士蔣府君墓銘」（宋・七五）
		県東村 （南直隸）		吏	われたため、始遷祖以来の系 譜を復元。	

51
顧
台州府天台 縣（浙江）
元朝
鎔
正月一日と夏至の日、「至大合 其族、行聚拜之礼」という。
「天台顧氏先德碑」（宋・一七）